

令和6年度

第12回 座談会

期 日：令和7年2月28日（金）
14：00～17：00

場 所：アルカディア市ヶ谷
5階「赤城」

公益財団法人 日本教材文化研究財団

テーマ：「令和6年度 幼児・小学生の保護者の
子育て意識・状況調査結果を読み解く
― これからの子育て・家庭教育支援に向けて ―」

1. 開会挨拶
2. 自己紹介
3. 【基調提案】座談会のねらいと内容構成
座長 <帝京大学教育学部長・教授／財団評議員 佐藤 晴雄>
4. 【テーマ1】今の家庭における親子の関わりの課題と、より良い親子関係構築の
ポイント～調査分析から
発表者<日本大学文理学部 教育学科・准教授 佐久間 邦友>
5. 【テーマ2】家庭教育の現状と今後の子育て支援の在り方
発表者<前小平市立小平第一小学校長／全家研教育対話主事 村松 守夫>
6. 【テーマ3】教育心理学の視点からの大切な親子の関わり
発表者<東京大学大学院教育学研究科・教授 遠藤 利彦>
7. 【総括】これからの子育て・家庭教育支援のあり方
8. 閉会挨拶

【ご出席者】（敬称略）

座長 佐藤 晴雄 （帝京大学教育学部長・教授／財団評議員）
パネラー 遠藤 利彦 （東京大学大学院教育学研究科・教授）
 佐久間 邦友（日本大学文理学部 教育学科・准教授）
 村松 守夫 （前小平市立小平第一小学校長／全家研教育対話主事）

第 1 2 回座談会

日 時 令和 7 年 2 月 2 8 日（金）

1. 開会のご挨拶

○三好

公益財団法人 日本教材文化研究財団の三好茂徳と申します。本日は、お忙しいところ、座談会にご出席を賜りまして、誠にありがとうございます。

日本教材文化研究財団では、今後の公益事業の指針作りに役立てるために、有識者の先生方をお招きしまして、毎年、このようなかたちで座談会を開催させていただいております。

今回で第 1 2 回目を数えますが、今回のテーマは、「令和 6 年度 幼児・小学生の保護者の子育て意識・状況調査結果を読み解く ― これからの子育て・家庭教育支援に向けて ―」でございます。

今回の座談会は、当公益財団とともに 5 0 年以上の家庭教育支援の活動を行っていたいただいております、株式会社新学社／全日本家庭教育研究会・ポピーの主催により、開催の運びとなりました。

この座談会に先立ちまして、今年度実施いたしました「令和 6 年度 幼児・小学生の保護者の子育て意識・状況調査」の結果をもとに、有識者の先生方にさまざまな角度からご考察いただき、今後の子育て・家庭教育支援の在り方について考える貴重な場と捉えております。

この座談会を企画するに当たりまして、保護者問題対応、学校地域連携、教育課程、学校経営、コミュニティ・スクールなど、幅広い研究分野で長年ご活躍されている帝京大学教育文化学科 学部長、教授の佐藤晴雄（さとう・はるお）先生にコーディネートおよび座長をお願い申し上げました。

（佐藤：よろしくお願いいたします。）

佐藤先生には、当公益財団の平成 2 1 年度の調査研究事業の「教育活性化研究会」の研究代表として「家庭教育に関する意識調査」を、また、平成 2 8 年度には、「家庭

教育活性化研究会」で「家庭教育と親子関係に関する調査研究」をご指導いただいております。また、令和7年度からの「家庭教育の実態と支援の在り方に関する調査研究」、こちらについても新たにご指導をいただく予定でございます。あわせて、長年、当公益財団の評議員としてもご指導をいただいております。

佐藤先生にはご多用の折に、座談会の企画のご検討また準備など、多大なお力添えをいただきましたことを、この場をお借りしまして厚く御礼を申し上げます。

そして、今回の座談会のパネラーとしまして、お一人目は、東京大学大学院教育学研究科 教授の遠藤利彦（えんどう・としひこ）先生、（遠藤：よろしくお願いいたします。）、お二人目が、日本大学文理学部教育学科・准教授の佐久間邦友（さくま・くにとも）先生、（佐久間：よろしくお願いいたします。）、そして三人目が、前小平市立小平第一小学校長で現在は全日本家庭教育研究会・教育対話主事の村松守夫先生（むらまつ・もりお）先生、（村松：はい、よろしくお願いいたします。）、この3名の先生方に、本日はご登壇をいただいております。

後ほど、また自己紹介をいただきますが、皆様、大変お忙しい中にもかかわらず、ご参加いただきまして、誠にありがとうございます。

本日は、座長の佐藤先生から基調提案をいただいた後、各パネラーの先生方から、それぞれの分担テーマについてのご発表をいただき、みなさまでご討論いただけるということで、たいへん楽しみにしております。長時間の座談会になりますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

2. 自己紹介

○品川 ありがとうございます。それでは早速、先生方からそれぞれ自己紹介をお願いしたいと思います。パネラーの遠藤先生からお願いいたします。

○遠藤 あらためまして、遠藤と申します。本日は、このような貴重な機会をいただきまして、心よりお礼を申し上げます。

私自身、発達心理学を専門にされていて、心理学の観点から親子関係、家族関係、その関係性の中で子どもの、特に、社会性であったり、あるいは感情面の発達だったり、がどんなふうに進んでいくかを一つのテーマにして、これまでさまざまなデータなどを取ってきました。

現在は、その専門のかたわらで、東大にある発達保育実践政策学センターでセンター長をさせていただいて、少しばかり保育や幼児教育に関連するような調査をしてきています。

私どものセンターでは、一つはベネッセさんとの共同で0歳から子どもが小学校1年になるまで2500ぐらいの家族を対象にした縦断調査を実施してまいりました。

と同時に、今年度から文部科学省からの委託を受けて、幼児教育の効果検証に関わる縦断調査をちょうど始めたばかりです。全国だいたい7000人を超える子どもたちを対象にした縦断調査で、その目的は、まさに小学校に上がる前に子どもたちがいろんな園でいろんな保育や幼児教育を受けていますが、その保育や幼児教育の質が小学校以降の子どもの育ちにどんな影響をもたらすか、それを明らかにするための縦断調査になります。

ただ、今回の調査は、またそれとは全然違った角度から親子関係の本質に迫ろうとしている研究で、研究結果を見させていただいて、大変勉強をさせていただいているところです。

本日は、先生方といろいろご議論させていただくことを非常に楽しみにしてまいりました。どうぞよろしくお願いいたします。

○品川 ありがとうございます。続きまして、佐久間先生、お願いいたします。

○佐久間 ご紹介いただきました日本大学文理学部教育学科の佐久間邦友と申します。よろしくお願いいたします。

私自身、専門は教育行政・政策ですが、実は学校というより学習塾の方をメインに研究しています。

私は生まれが福島で、福島という土地は中学校3年生の約半数ぐらいは塾に通っています。逆に、隣の山形県は30%台なんです。過疎地域や人口の少ないところです。

と、やはり塾の環境がないということで、教育委員会が学習塾などを行っている事例があり、それを卒業論文から今まで追っているところです。この5～6年、そういう事業が当たり前のようになっていますが、2008年ぐらいの登場時には、いろんなマスコミの方からご批判等をいただいた政策もあったりするわけです。

本日は、子育て意識調査ということで、いろいろな情報を述べさせていただいて、また、遠藤先生をはじめ、村松先生、そして佐藤先生…、実は私は指導教員になりますが（笑）、いろいろとディスカッションができればと思っています。本日はよろしくお願いいたします。

○品川 よろしく願いいたします。続きまして、村松先生、よろしく願いいたします。

○村松 はい、村松でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

私は、全日本家庭教育研究会・教育対話主事として、昨年の4月に着任し、ちょうど1年が経ちます。教育対話主事には私よりも経験豊富な4人の先生がいらっしゃいますが、本日は「村松、対応して行ってこい」という指示を受け、参加しております。私は昔から「はい、喜んで」と応えるのが信条ですので、今回もその思いでお引き受けしました。

私自身は、小学校の現場で、最初はろう学校でしたが、教育現場で合計42年間勤めてまいりました。

大学時代は社会教育が専門で、佐藤先生が社会教育ですが、ちょうど1970年代の国際婦人年、1981年の国際障害者年、障害者障害児教育、婦人教育ということで、いろいろと考えてきたところもございます。

今日は家庭教育ということで先生方からいろいろ教わりながら、また自分の見識を広めてまいりたいと思います。どうぞよろしく願いをいたします。以上です。

○品川 ありがとうございます。よろしくお願いいたします。それでは最後に佐藤先生の方からよろしくお願いいたします。

○佐藤 はい。先ほどもご紹介いただきました帝京大学の佐藤晴雄と申します。

2年前まで日本大学に17年間勤務してまして、そのとき学生だったのが佐久間先生です。その前には、帝京大学に14年間おりました。さらにその前10年間、東京都大田区で社会教育主事の仕事をしていました。

担当はいろいろありましたが、その中でも家庭教育学級なども担当していて、当時よく言われたのが、「家庭教育学級やいろんな類似の講座に参加してくれる親は問題ない」。なかなかそういうところにいらっしゃらない方の家庭教育支援をどうできるか。これは永遠の課題なんですね。そんなこともあり、家庭教育に関わり、本財団の調査にも過去、2回関係させていただきました。

同時に学校、家庭、地域の連携ということについて、昭和57年ぐらいから関心がありましたが、当時はそうした連携なんてどうでもいいというような扱いがなされていました。どうでもいいことをやっているような…。それがだんだん変わってきたのが平成8年ごろです。国の答申、「21世紀を展望する我が国の教育の在り方について第一次答申」が出たのですが、これがかつてないほど学校、家庭、地域の連携を重視した答申とすることができます。

それ以降、学校支援ボランティア、そして、コミュニティ・スクール、これは創設期から関わってまして、文科省の委託研究を3度受けて全国調査を行っています。その前にも、文教協会の委託を受けて実施しました。合計でコミュニティ・スクール調査も4回やってまして、その中からやはり家庭の問題も浮かび上がってくるということで、家庭教育の問題と学校、家庭、地域の連携を結びつけて捉えていきたいということで研究を進めて参りました。

本日は、今回の調査の中からどういうことが読み取れるのかということをご議論いただきたいと思います。皆さんどうぞよろしくお願いいたします。

○品川 ありがとうございます。よろしくお願いいたします。

それでは早速、基調提案を、佐藤先生、よろしくお願いいたします。

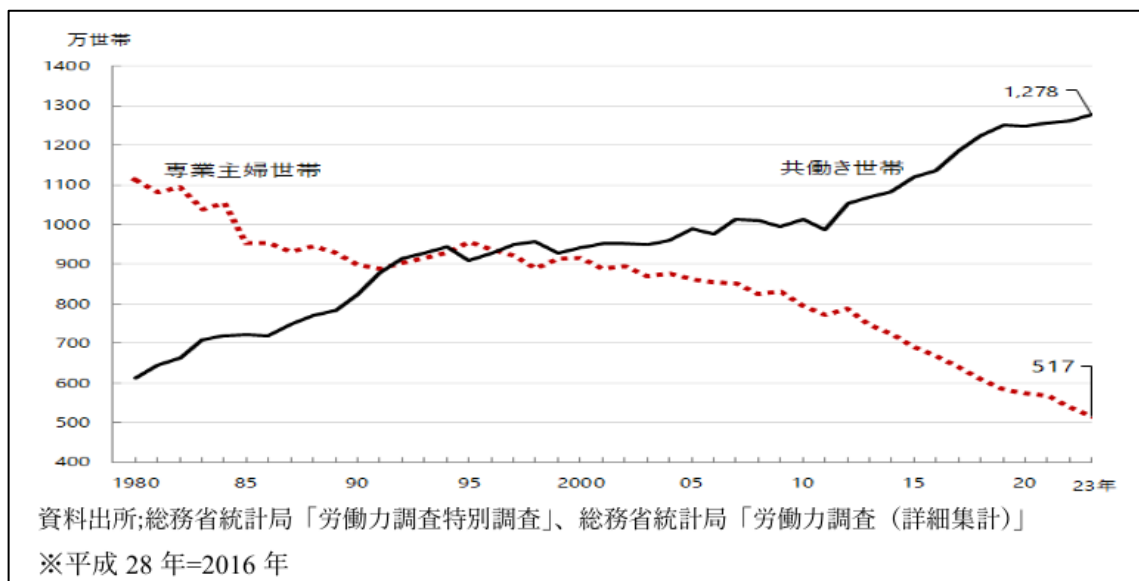
3. 【基調提案】座談会のねらいと内容構成＜佐藤晴雄先生＞

○佐藤 はい。基調提案ということで、時間を10分いただいております。

今日配布していただいた「子育て意識・状況調査結果の『総括』」、この資料に基づいてお話し申し上げたいと思います。

この中で、今回、親子の関係、ふれあいの時間に注目して、特に関わり時間のあまり長くない家庭層に対してどういう支援ができるか、あるいは、そういう家庭に対してどのような子育て意識、あるいは子育て行動をとられているのか。これを中心に基調提案として申し上げたいと思います。

最初の1ページ目、親子のふれあいに関して、これは言うまでもなく、その背景として、共働き家庭世帯の増加が考えられるわけです。従いまして、必然的に家庭にお子さんに関わる時間、父親でも母親でもいいのですが、時間がどんどん少なくなっています。



これは当たり前のことで、グラフを見ていただくと、青い方の共働き世帯がずっと増えています。これとは対照的に、専業主婦世帯が当然減るわけです。この両線が、だいたい1995年ぐらいで交差している点かなと思います。現在、周り見ても専業主婦はかなり少なくなっているという状況です。良い・悪いは別です。

少し話がズレますが、専業主婦が少なくなると、日中、地域の中で子どもを支援する人があまりいなくなるのではと逆に心配しています。昼間は高齢者と子どもしかい

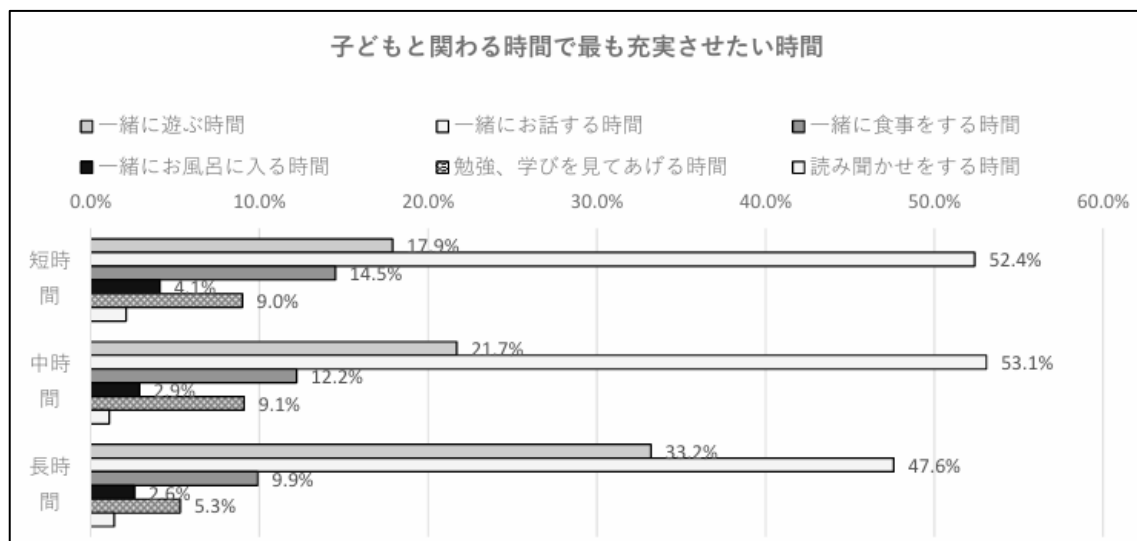
なくなるのではないかと。「子ども１１０番」が機能しなくなるのではという心配もあります。そんなこともあるので、それに代わる何か取り組みとか施策が今後必要になるのではと考えています。

下の表は、平成６年に行った調査の回答者の属性と子どもとの一緒の時間に関してです。赤い字が数字として少ないことを示しています。

令和6年調査 回答者の職業 * Q2子どもと一緒にの時間 Crosstabulation					
% within 回答者の職業					
		Q2子どもと一緒にの時間			Total
		短時間	中時間	長時間	
回答者の職業	公務員	17.9%	42.9%	39.3%	100.0%
	会社員(事務系)	19.8%	55.4%	24.8%	100.0%
	会社員(技術系)	12.7%	65.1%	22.2%	100.0%
	会社員(その他)	14.6%	53.1%	32.3%	100.0%
	自営業	25.0%	50.0%	25.0%	100.0%
	自由業		66.7%	33.3%	100.0%
	専業主婦(主夫)	11.5%	35.4%	53.1%	100.0%
	パート・アルバイト	14.1%	48.9%	37.0%	100.0%
	その他	14.3%	28.6%	57.1%	100.0%
	無職	12.5%	37.5%	50.0%	100.0%
Total		14.0%	45.8%	40.2%	100.0%

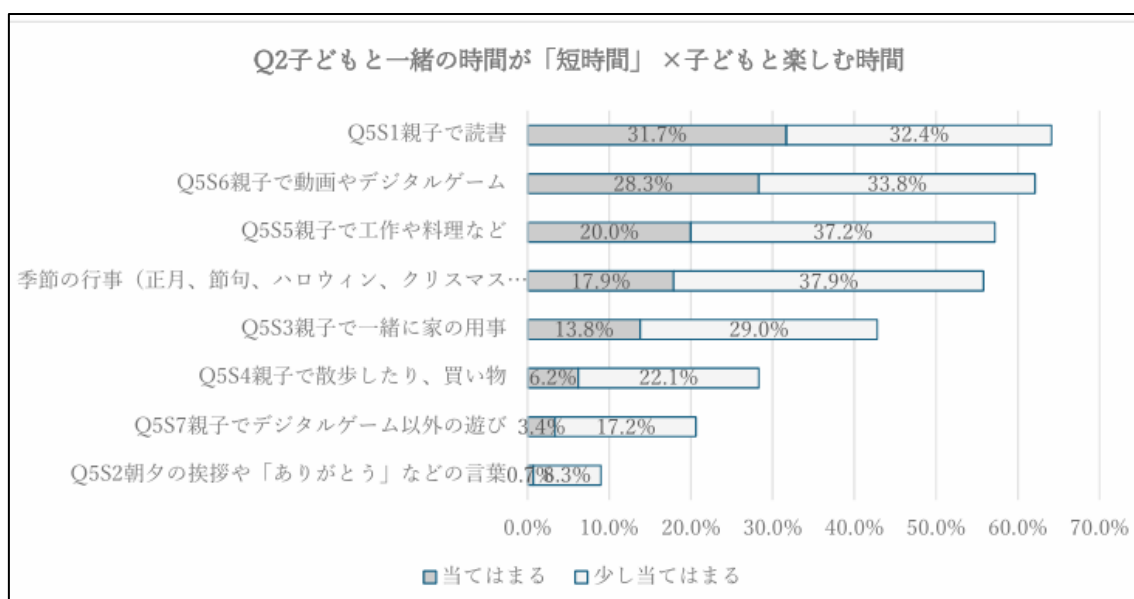
短時間は自営業の方が多いということもありますが、公務員、会社員の方が短時間ということで１０～２０％、それ以下になっています。専業主婦（主夫）を見ていただくと、長時間の方が半数以上。これは当たり前の結果ですが、一応お示ししておきます。

今回の回答者の年代についてですが、回答者の年代が上がると短時間層が相対的に高くなります。その背景として、年代が上がると、子がある程度の年齢に達して、自立的な活動ができるようになるから、あまり手をかけなくてもいいという感じだと思います。あまり話を聞いたり遊んだりするようなことも少なくなるので、これは当然の結果で予想し得るものだと思います。



「2 関わり「短時間層」の方の特徴」について、「子どもと関わる時間で最も充実させたい時間では何か」ということで、いちばん棒の長いところを見ていただきますと、「一緒にお話する時間」となっています。長時間になると若干数字が低くなります。ただ全体的に、その次の「一緒に食事をする時間」が若干短時間層では多くなります。だからこれは、「とにかく一緒にいたい」という気持ちの表れかなと思います。そのかわり、「勉強を見る」などは、ちょっと少ないということです。

次の Q2 の図を見ていただくと、子どもと楽しむ時間について、短時間層で「親子で読書をした」「親子で動画やデジタルゲームをした」「親子で工作や料理などをした」など、親子で関わっていく時間が比較的数字としては高くなっています。

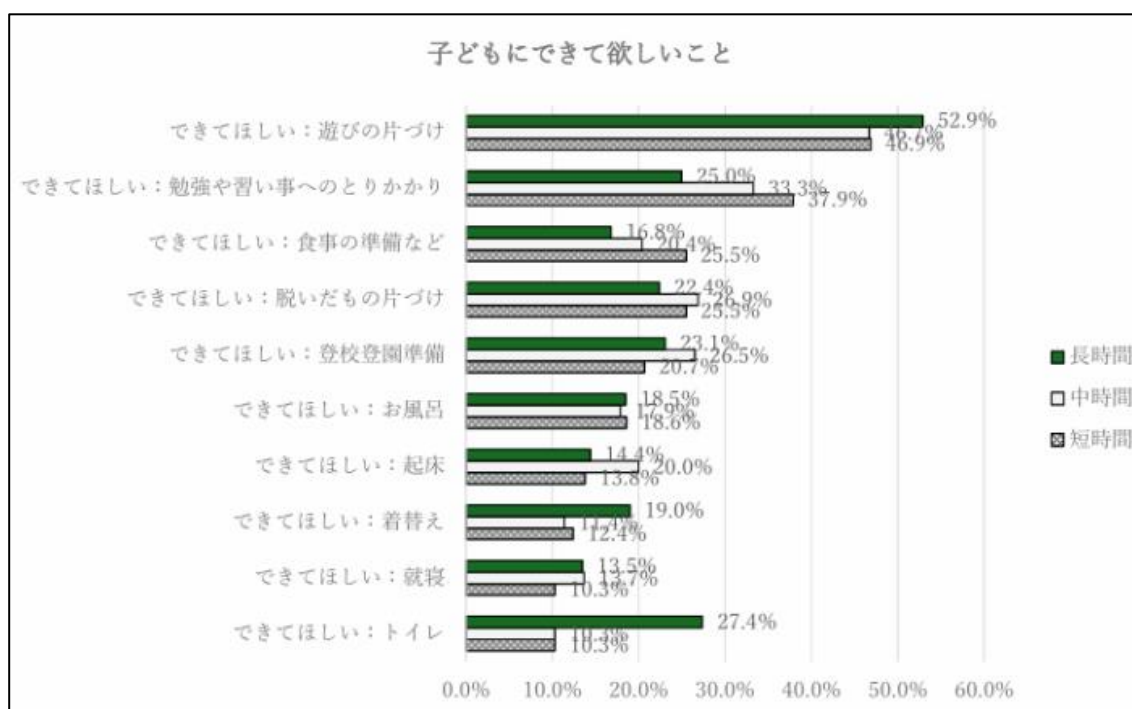


ただ、長時間層に比べるとやはり少なめですが、関わりの短い時間、とにかく親子で読書するとか、ゲームをするとか、料理を作るとかというかたちで、いわゆる子どもが楽しめる時間の中でも、気軽に行えるものが短時間層では多いということです。

あと「(2) わが子に『できてほしい』こと」。これは、短時間層では「勉強や習い事のとりかかり」「食事の準備など」が、相対的に少し高い回答率になります。長時間層で高いのが「遊びの片付け」「着替え」「トイレ」など基本的に生活習慣に関してで、これは短時間層では比較的低いです。これは、勝手な解釈になるかもしれませんが、短時間層の子は日頃から親との接触が少ないことから、長時間層に比べてむしろ自立できている可能性もあるということです。

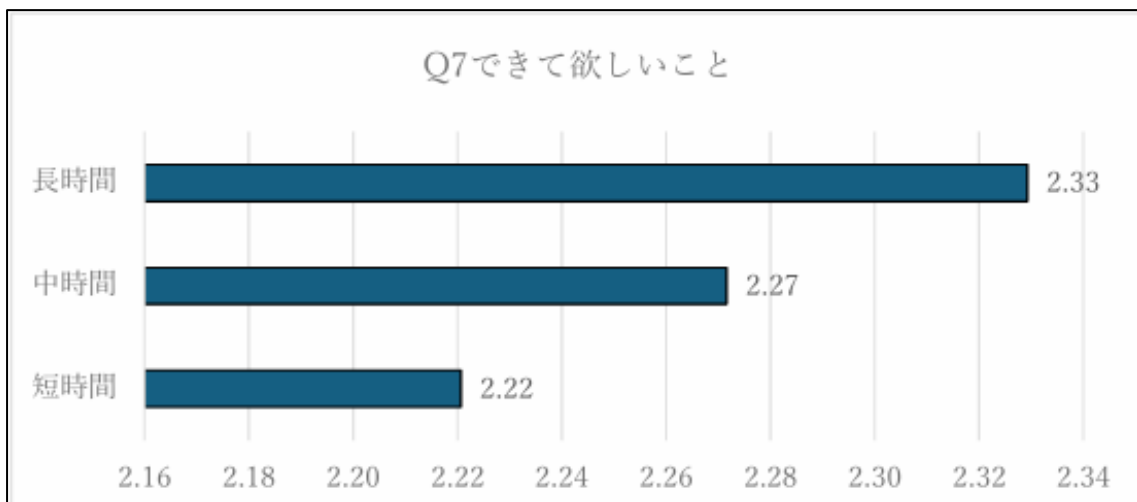
「できてほしいこと」はいろいろあるのですが、長時間層の子どもはその自立性が弱いというか、高くないと言っているのでしょうか…。短時間層の子どもはある程度自立できると解釈できます。長時間になるほど我が子の様子をこまめに見ているが、短時間になるとできてほしいことを見逃していることもあるのかなと思います。よく見ていないので、自立できているように見てしまうということも考えられます。あまり手をかけてないという可能性もあると思います。これはちょっと難しいので、また遠藤先生がからご助言いただきたいと思います。

Q7を見ていただくと、「子どもにできて欲しいこと」の時間別です。



いちばん上が長時間層、いちばん下が短時間層です。「できてほしい：遊びの片付け」に顕著な数字の差がないのですが、2つ目の「できてほしい：勉強や習い事のとりかかり」について、時間が短くなると回答率が高くなります。「できてほしい：食事の準備など」もそういう傾向にあります。いちばん下を見ていただくと、「できてほしい：トイレ」は、長時間層の方が高くなります。これと同じように下から3つ目、「できてほしい：着替え」とか、この辺の長時間層が数字として高くなります。長時間層は短時間層に比べて、子どもの方の自立性が若干弱いからということが、このデータからは解釈も可能だということです。

下の「Q7」が全体的に「できて欲しいこと」を合計していますが、長時間層の方が、数値が高くなっているということです。



「(3) わが子への声かけ」ですが、この枠の中にあるように「命令的声かけ」と「助長的声かけ」に分けてあります。「勉強しなさい」「早くしなさい」「何々しなさい」は「命令的声かけ」と名前をつけていますが、「助長的声かけ」は「偉いね」「ありがとう」「頑張ってるね」などを指します。

表4.「わが子への声がけ」

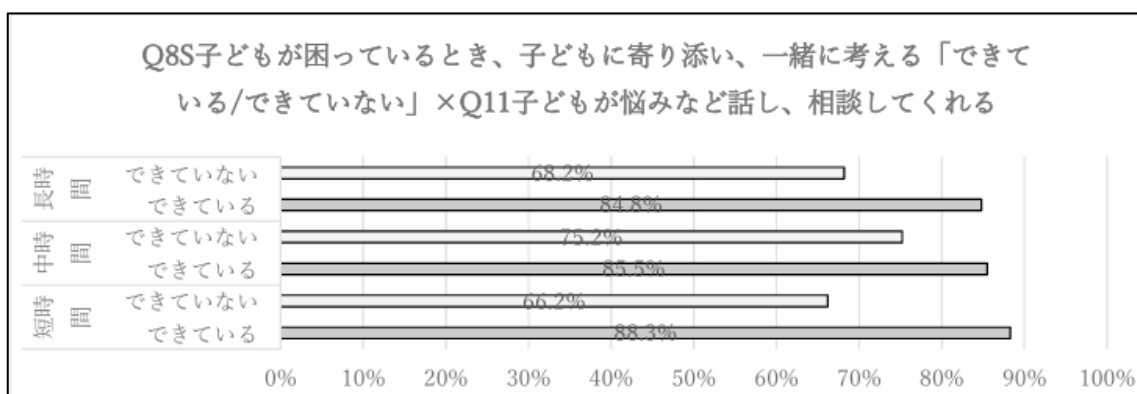
	子との関わり時間	N	Mean	
Q14命令的声かけ	短時間	145	1.28	>長時間**
	中時間	475	1.11	
	長時間	416	0.84	
	Total	1036	1.03	
Q14助長声かけ	短時間	145	1.20	<中・長時間**
	中時間	475	1.54	<長時間**
	長時間	416	1.94	
	Total	1036	1.65	

表「Q14 命令的声かけ」を見ていただくと、短時間層が長時間層に比べて多くなっています。子どもとの関わり時間が短い層はどうしても命令的になってしまい、助長的な声かけは少なくなってくるのですね。子どもとの関わりが短いと、どうしても「ああしてほしい」「こうしてほしい」というところだけに目が行ってしまって、励ますまでの余裕がないのかなと思います。

あと「(4) 子を褒める」についても、助長的な声かけとも関係はしてきます。

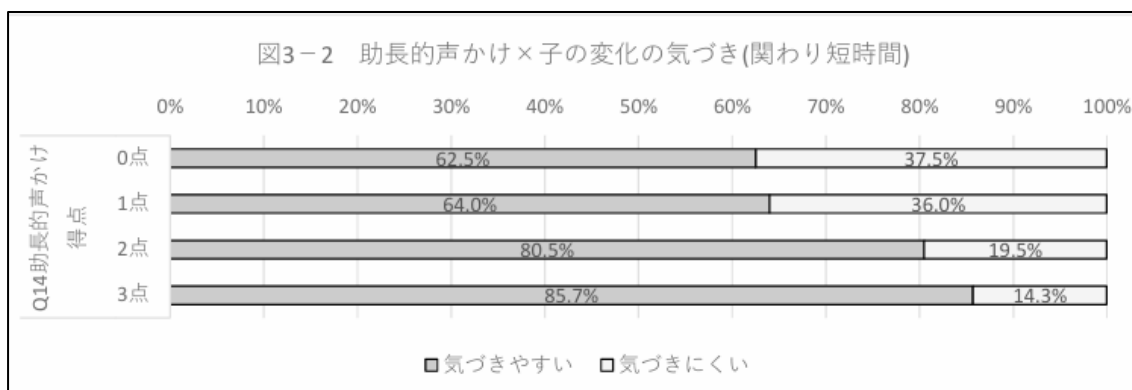
少し飛ばして、「3. 関わりが短い中でも、良い親子関係を築くためのポイント」があります。「子どもは悩みなどを相談してくれるか」「子どもの落ち込み、悩みなど変化に気づきやすいか」「子どもと交わす約束を子どもは守っているか」「子どもにできるようになって欲しいこと」などを取り上げていますが、下のグラフを見ると子どもと関わりを持ちやすい、持てる時間帯について、パターン差が出ています。

今度はQ8のグラフをご覧ください。

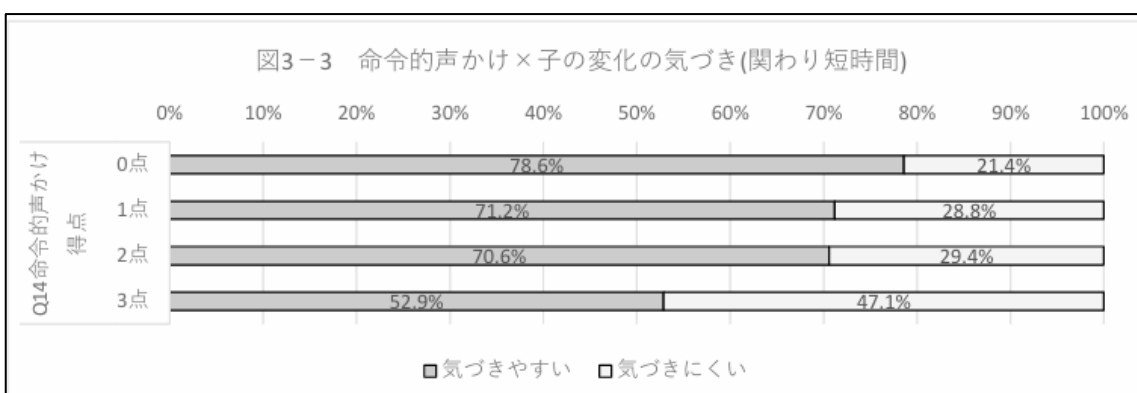


「Q8S 子どもが困っているとき、子どもに寄り添い、一緒に考える」ことが「できている／できていない」、「子どもが悩みなどを話し、相談してくれる」ということについて、「寄り添いができている／できていない」ということになると、短時間層、いちばん下ですが、「子どもとの関わりができていない」が「できている」より数値が高くなっています。これは他の時間層でも同じですが、少しだけ長時間層の数字が高くなっています。

下のグラフ（図3-2）を見ていただくと、「子どもの落ち込みや悩みなどの変化に気づきやすいか」について、「助長の声かけ」というのは数項目があって、それぞれ該当すると1点加えて合計してあります。だから点数が高い方が、声かけが多いとなるということになります。



そうすると、短時間層の中でも助長の声かけ「頑張ったね」「すごいね」と声をかけているほうが子どもの変化に気づきやすいということがはっきり出ています。だから、短時間であっても、助長の声かけに努めていただくと望ましい結果になる可能性があるということです。



次の図3-3の「グラフは、逆に「命令の声かけ」についてです。得点が高い、いわゆるしょっちゅう命令的な声かけしている親の場合は、「子どもの変化に気づきやす

い」が減るということです。そういう意味で言うと、助長の声かけをすることは、短時間層でも重要なことということがわかります。

その下の「(3) 子どもと交わす約束を子どもは守っているか。」について、子どもとの約束を子どもは守っているかどうか。これに関しては助長の声かけの方が「ほとんど守られている」の得点「3」の方が28.6%で、「守られることが多い」を足すとはっきり数値差が出ています。

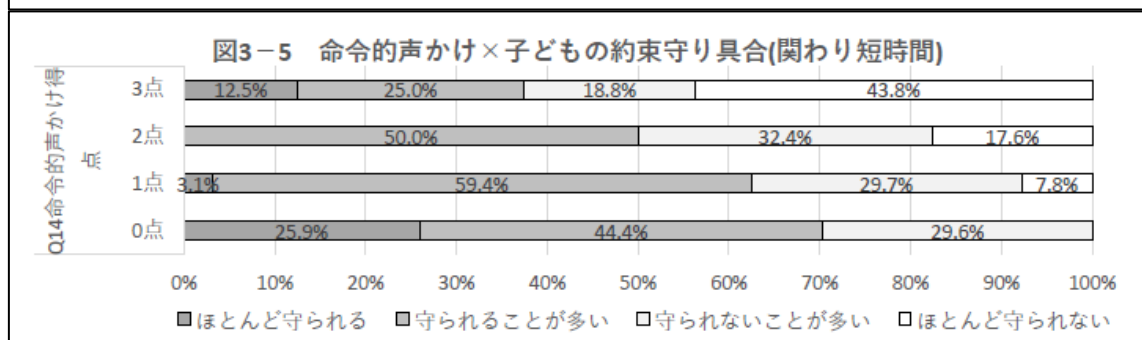
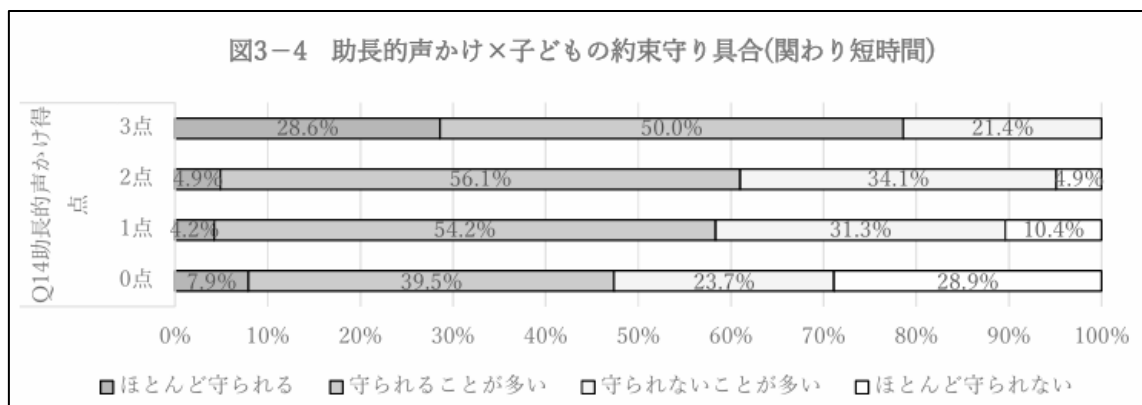
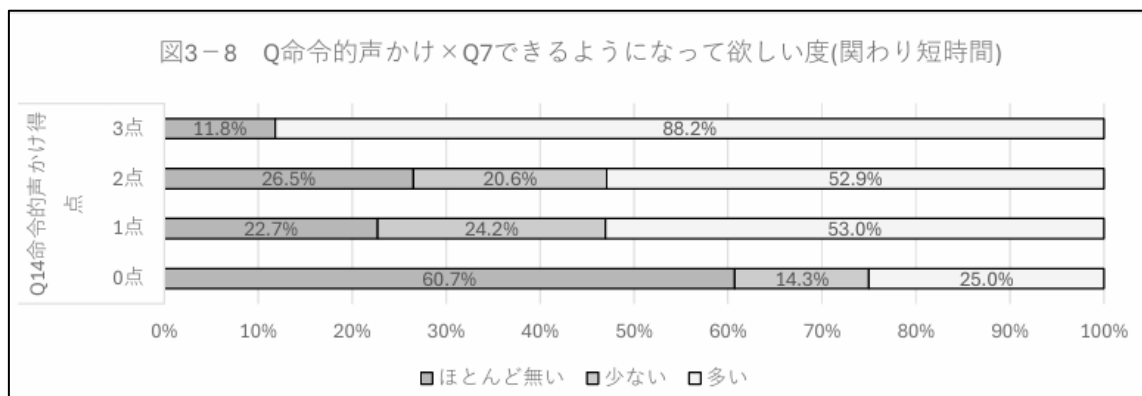
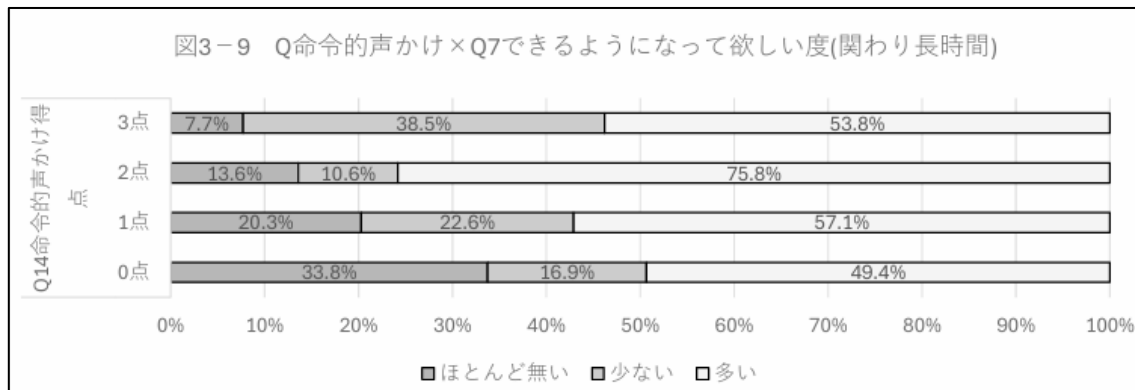


図3-8を見ていただくと、「命令の声かけ」に関する結果になります。





このようなことで「(4) 子どもにできるようになって欲しいこと」ということが、図3-8と9で、8が関わりの短い時間、9の方が関わりの長い時間です。

いずれに対しても命令的声かけが関わり時間の長短を超えて、どちらに対しても、命令的声かけだとできるようになってほしいということが増えてしまうということ。だから、命令的声かけはあまり意味ないということがいえます。むしろ0点、命令的声かけをしない方が、できるようになってほしいことがあまりないこともないということです。数字の差はありますが、そこだけの特徴としてでているかなと思います。

ということで、「結論」を述べたいと思います。

(1)子どもが困っているとき、子どもに寄り添い、一緒に考える」親の方が「子どもが悩みなどを話し、相談してくれる」傾向にあることから、日頃から子どもとの関わりにおいては、「寄り添い・一緒に考える」など深い関わり…、言い換えれば「助長的関わり」になりますが、そのほうが良い親子関係を築くことにつながるといえるかなということ。これは子どもとの関わり時間が短くてもいえることです。

(2)関わり時間が「短時間」であっても、「命令的声かけ」、「勉強しなさい」などをなるべく控え、「助長的声かけ」、「えらいね」「ありがとう」などプラスな声かけがわが子の変化に気づきやすくなり、子が約束を守るなど規範意識を強める傾向が見られます。

(3)さらに、助長的声かけを行う方が「できるようになって欲しいこと」も少ない。逆に言うと、少ないからあまり命令しないのかなと考えられます。できているからで

すね。そういう意味で言うと、指示的・命令的に行動を促すよりも、励まし・支える働きかけの方が重要で、これは関わる時間に関係ないということがいえます。

(4)つい命令的になってしまう。これは感情的…、感情の問題が関係しますが、そういう意味で言うと、感情的にならず、また命令的な働きかけをできるだけ避けることが重要かと思います。

(5)以上から、望ましい親子関係を築くためには、命令口調にならず、励まし／褒めるなどの評価を行い、かつ感情的にならないように努めることが大切になる。また関わり時間が長くなくても、子どもに寄り添い、ともに考えるなど「濃い」関係性を築け、子どもが心を開くようになることが大切であって、そういう意味で、助長的な働きかけにつながっていくと。ですから、短くても「濃い」関係が重要であるということがいえると思います。

若干時間が伸びて申し訳ありません。この調査から言われる、いわゆる子どもとの関わり時間に関して読み取れる結果について解釈申し上げました。以上です。

○品川 ありがとうございます。続きまして、パネラーの先生方からの発表に移りたいと思います。

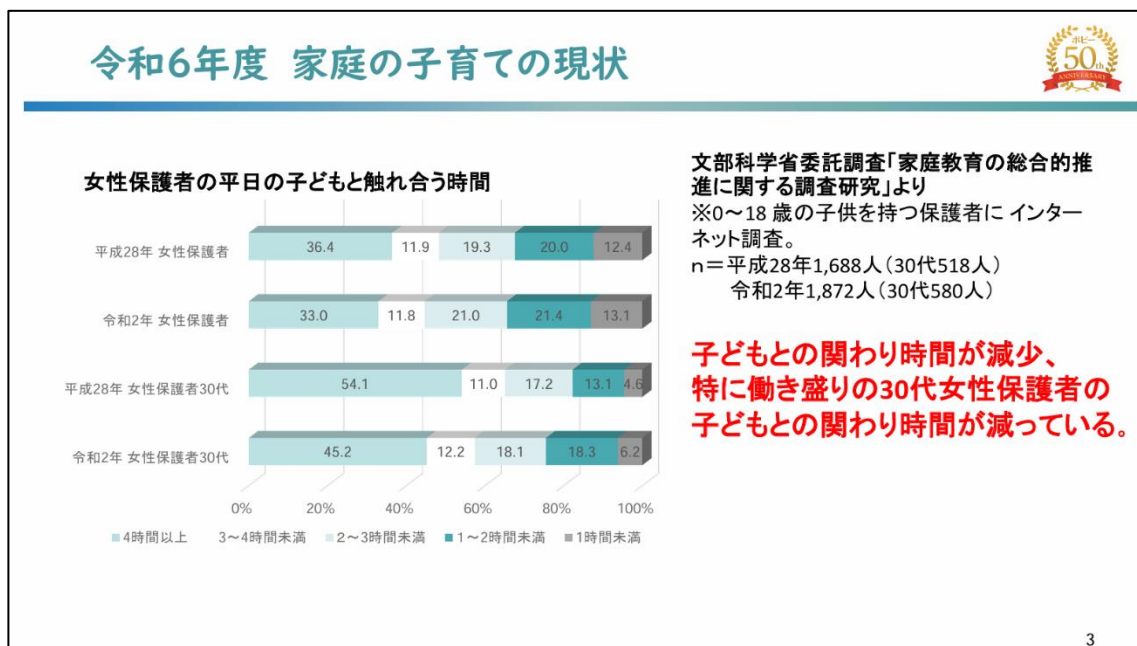
最初は佐久間先生の方からよろしくお願いいたします。

4. 【テーマ1】今の家庭における親子の関わりの課題と、より良い親子関係構築のポイント～調査分析から<佐久間 邦友先生>

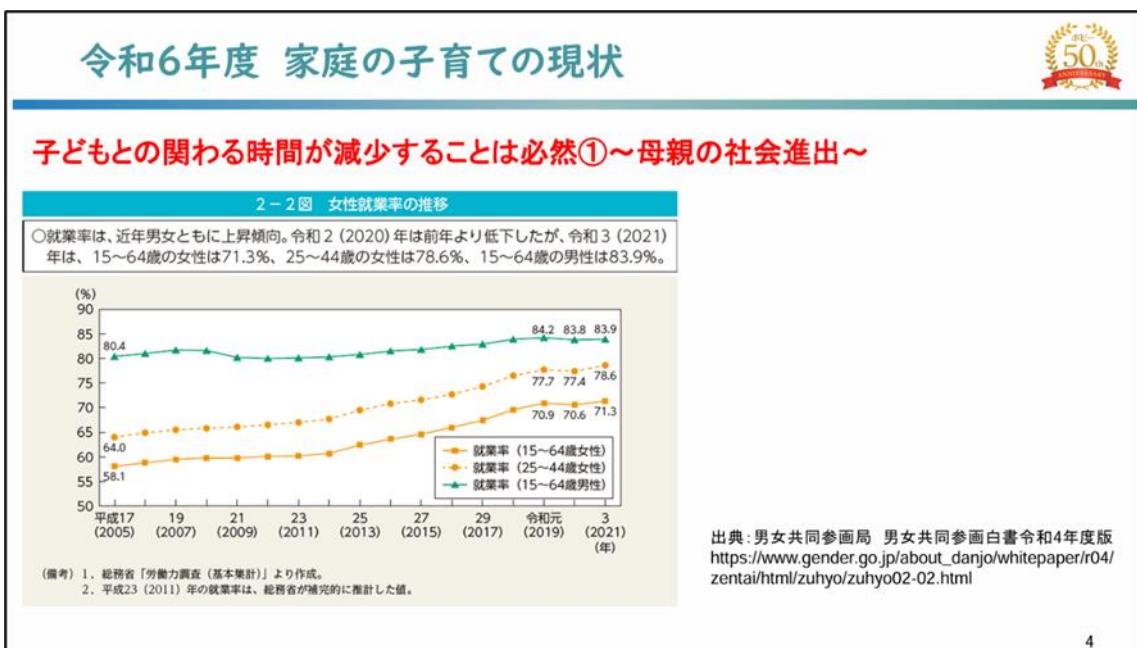
○佐久間 はい、日本大学の佐久間でございます。私の方からは「子育て意識・状況調査分析」の冊子の方、調査の概要等をいくつかお話させていただければと思います。

右下のスライド番号を申し上げますので、対照していただければと思います。

まず、スライド3をご覧ください。ページをめくったところになります。

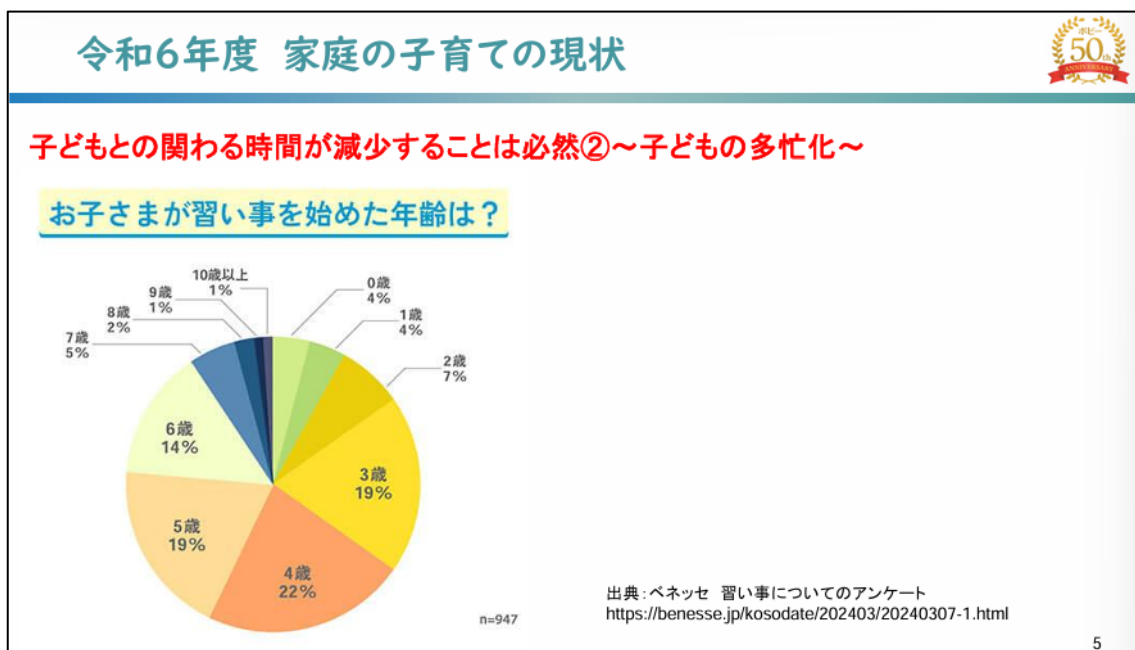


こちらは文科省の委託調査になりますが、子どもとの関わり時間の減少につきましては、やはり働き盛りの30代の女性の保護者の方が減っていくことが見て取れます。これは、スライド4にも関係しますが、母親の社会進出とかの関係がございます。先ほど佐藤先生からもありましたが、やはり夫婦共働きの世帯が増えていることは、皆さん、わかれることだと思います。



ただ、あの面白いのが、例えば、よく中学校の公民の授業で出てくる核家族、拡大家族がありますが、拡大家族の代表例が『サザエさん』、核家族の代表例が『クレヨンしんちゃん』だと思いますが、その後の家族が出てくるアニメはないのですよね。みさえもサザエさんも専業主婦という形でパートなどのシーンは描いてない。ましてや夫婦共働きも描かれてないという現状です。もちろん女性の社会進出を否定するわけではありませんし、昨今の収入事情もありますし、就業形態も変化していますので、やはり社会の変化のところで、子どもと接する時間には変化があるのかなと思います。また、あの家族の形というのもやはり変わりつつあるのかなと。一時期流行ったようなシェアハウスなどもありますし、さまざま形があるのではないかなと思います。

スライド5をご覧くださいければと思います。



こちらは、「子どもの習い事を始めた年齢は？」ということで、さまざまな調査があります。見ていただきたいのが、3・4・5歳がもうボリュームゾーンである、つまり、就学前から習い事をしているということが一つ挙げられます。例えば、スイミング、書道、バレエなどさまざまあります。この後、学齢期、つまり小学校に入学すると、すべてではないのですが、平均的に見ていくと、特に都市部の場合を見ていくと、たいてい小1から小3ぐらいの間に体験系の塾のようなところに行きます。3・4年生から中学校受験の塾に入り始めたり、英会話教室を利用したりします。

そうすると、あえて上に書いてありますが、「子どもの多忙化」、そもそも親がいても子どもは家にいないという状況が、もしかしたら起きているのではないかということです。これは学童とか、スポーツ少年団とかさまざまなものが出てきていますので、サザエさんとクレヨンしんちゃんの頃の遊びというものがなくなりつつあるというか、そもそも場所も消えている可能性もあるかなというのはありました。

それで、スライド6になりますが、よりよい親子関係、家庭教育の確立等をサポートして、このような調査を行ったということになっています。

子育て意識・状況調査分析の趣旨と狙い



より良い「親子関係」「家庭教育」の確立、「10分よりそい運動」の推進につながるサポート、情報提供を創出するため、「子育て意識・状況 インターネットアンケート調査※」の結果に対しクロス集計、相関分析を実施、下記の把握を行った。

1. 子どもとの関わり時間をもちにくい家庭の傾向、課題のポイントは何か。
2. より良い「親子関係」「家庭教育」を実現する上での行動、意識のポイント。
子どもとの関わり時間をもちにくい家庭でも、できることは何か。

※「子育て意識・状況 インターネットアンケート調査」

令和6年5月下旬、調査会社マクロミルに委託し実施。2歳～小学4年生の子どもの保護者約1,000人が対象。
対象者の属性、アンケート質問項目と質問ごとの回答集計データは、「アンケート基礎データ」に記載。

6

ページめくって、スライド7をご覧ください。

関わり時間が少ない保護者の傾向



親の就業形態別 平日の子どもと関わる時間



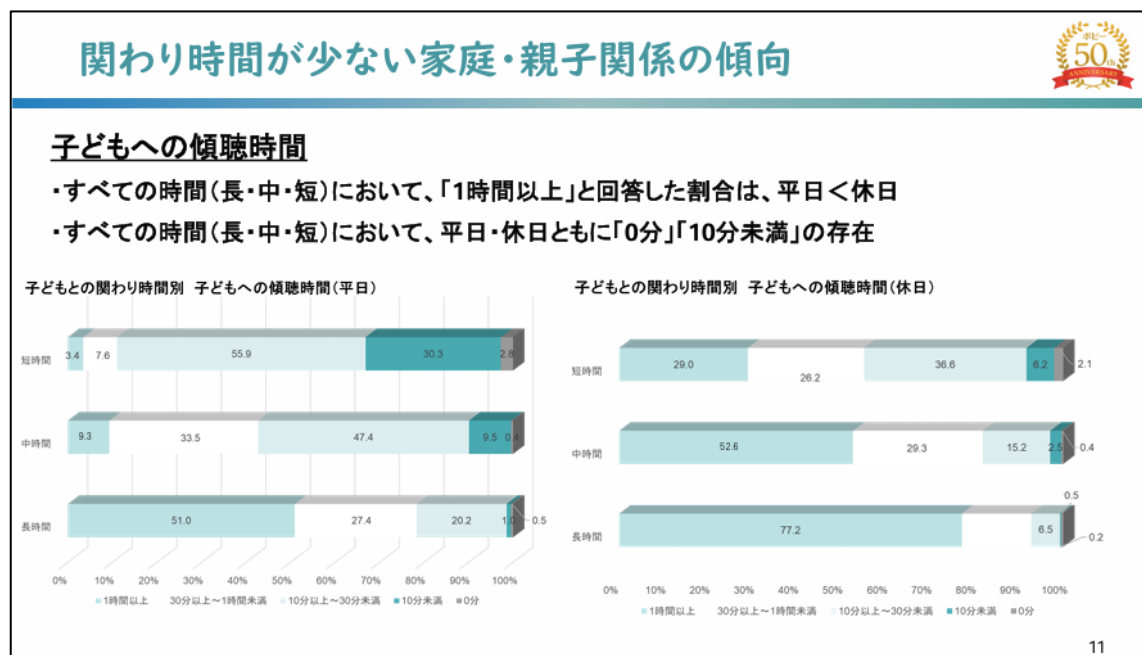
フルタイム就業親の子どもとの関わり時間がやはり短く、47.7%が1時間未満。
家事専業でも28.2%が1時間未満。

やはりフルタイムの親の場合、お子さんとの関わり時間が短く、47.7%が1時間未満という状況です。若干気になるのが、親が専業であっても、28.2%、約3割が1時間未満です。この数字からはなぜそのように至ったのかが正直わかりませんが、例えば、あの介護を抱えているとか、あとは内職ではありませんが家で仕事をするタイプもあるかもしれませんし、データからは、あくまでもこういう数値しか読み取れませんが、ある意味、専業の保護者の方でさえ（子どもと関わる時間が）短くなっているのではないかということも、これから考えなければならぬと思っています。

ただ、スライド7にも関係しますが、やはり学齢が上がるとともに、子どもとの関わる時間が短くなっています。ということは、例えば、お父さん・お母さんが専業であっても、お子さんが塾とか習い事に関わることができないということがありえますので、ある意味親子の関係性が寂しいような状況もあるのかなと思います。

スライド9、スライド10につきましては、スライド11と一緒にしていますので、まとめて見ていただければと思います。

スライド11を見ていただければと思います。

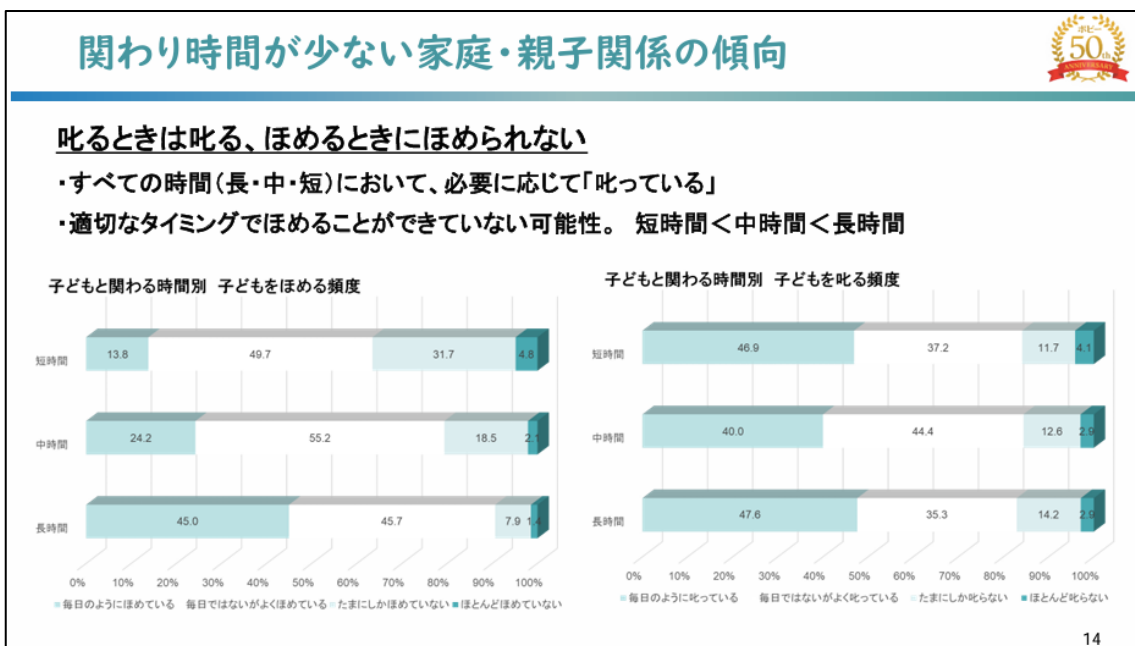


30分未満が「短時間」、30分～2時間未満が「中時間」、そして2時間以上子供との関わりがある場合には「長時間」と設定しています。

短時間のご家庭の場合には、平日・休日ともにやはり傾聴の時間が取れていないという状況が数字から見えています。ただし、これもあの調査の難しいところではあると思いますが、ご本人は傾聴ができないと認識していても、実はできていることもありえますし、逆もありえます。ただ、あくまでも回答された方としては、傾聴ができていないと認識されていますので、このような数字になっています。

ただ、長時間のふれあいがあるから傾聴しているかということ実はそうでもなくて、例えば、平日であれば0分、10分未満、10～30分未満というのも一定数存在していますので、この点について、これからどういうふうを考えていくのが結構なポイントになってくると思います。

次にスライド14をご覧ください。やはりすべての時間帯において必要に応じて叱っているという状況が見えてきました。



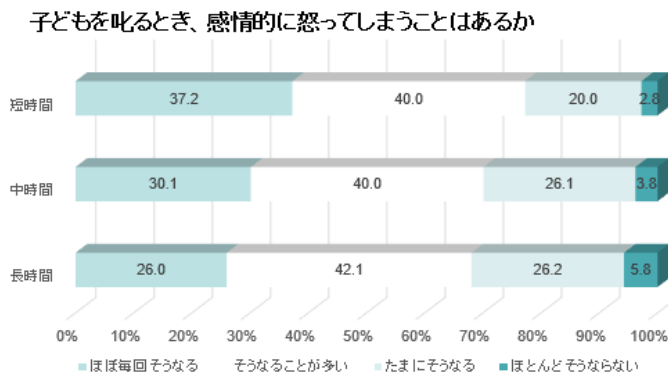
スライド14の上にもありますが、叱るときは叱る、けれど、褒めるときに褒められないというのが、データから少し見えてきたかなというところですよ。つまり、適切なタイミングで褒めてあげることができていない可能性があるのではないかということが、数字から見て取れたということです。

ページをめくって、スライド15をご覧ください。「叱るときに感情的になるか」という質問ですが、お子さんとの関わりが短いほど感情的になり、怒ってしまう傾向にあるということが見えてきました。

関わり時間が少ない家庭・親子関係の傾向



叱る頻度は子どもとの関わり時間と関係していないが、「叱るとき、感情的になり怒ってしまうことがあるか」は関係している。



子どもとの関わり時間が短いほど、感情的になり、怒ってしまう傾向がある。

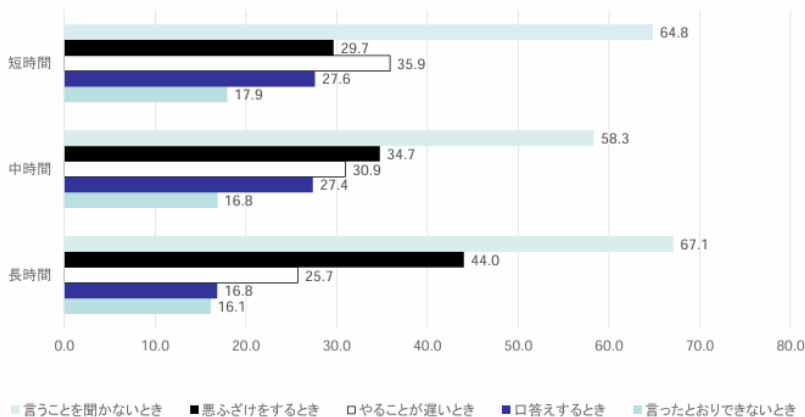
なぜかなと考えていくと、スライド16をご覧くださいと思うのですが、

関わり時間が少ない家庭・親子関係の傾向



「感情的になり怒ってしまう」ことが多いのはどんなときか

下記は「特に多いときを3つまでお選びください」の質問(Q24)での上位5選択肢の関わり時間別選択された割合。



子どもとの関わり時間が短いと、「やることが遅いとき」の選択が多く、また「言った通りできないとき」の選択がやや増えている。
また、時間が短いと「口答え」で、長いと「悪ふざけ」で、感情的に叱るが多くなっている。

16

長時間層から短時間層まですべてにおいて感情的に怒ってしまうのは、「言うことを聞かなかったとき」というのが共通事項です。ただ、唯一、短時間で統一するというよりも、中時間、長時間ですと、「悪ふざけをするとき」「やることが遅いとき」「口答えするとき」「言った通りできないとき」というふうに左下がりでグラフの数字が減っています。逆に、短時間層だけポンと突出していくのが何かということ、「やることが遅いとき」です。

つまり、あくまで仮説というか推測でお話すると、短時間しか関われないご家庭は何かしら余裕がなかったり、忙しかったりとか、多分そういう状況かと思われます。イメージで言いますと、保育園や学童へお迎えに行って、家に帰ってきて、ご飯をレンチンして…という状況の中で、例えば、「服を脱ぎなさい」「片付けなさい」というふうな、やることができないとつい言うってしまうのかなというのが、あくまで推測ですが、そう想像できるまでの数値が出てきたということです。

スライド18ですが、やはり感情的な怒りというのは、ゆとりがあるかどうかというのが結構なポイントかなと思っています。私も学生をたまに叱りますが、心にゆとりがあるときは本当におおらかな気持ちでいて、締め切りが1日2日遅れても余裕があるのですが、そうはいかないときもあります。やはり子どもとの関わる時間が短いほど感情的に怒ってしまう傾向にあるのではないかなと思います。

関わり時間が少ない家庭・親子関係の傾向



感情的な怒りと「ゆとり」の必要性～原因～

- ・子どもとの関わる時間が短いほど、感情的に怒ってしまう傾向
- ・感情的な怒りの原因として
 - 「悪ふざけをするとき」…短時間<中時間<長時間
 - 「やることが遅いとき」…短時間>中時間>長時間
- ・感情的に怒ってしまった後、子どもとの関わり時間が短いほど謝れていない。
※感情的に怒っていることが認識できていない可能性

18

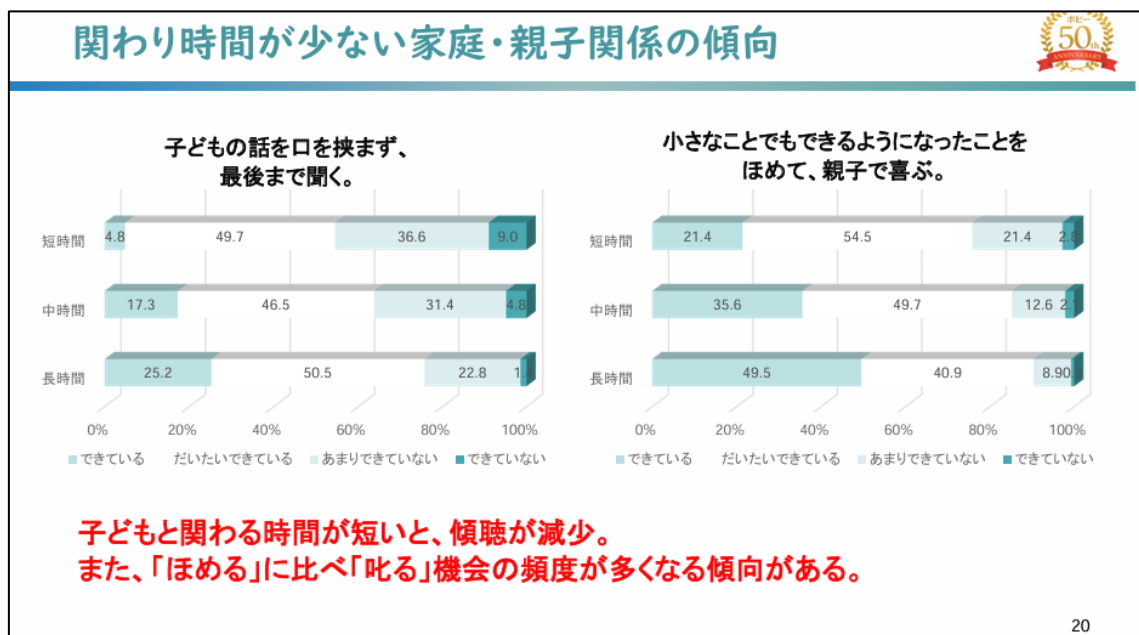
ただ、感情的な怒りの原因としては、やはり「悪ふざけをするとき」というのは、短時間、中時間、長時間というかたちで、長時間になればなるほど増えています。やることが遅いときというのは逆になっていますので、やはり余裕の有無というのがポイントかなと思います。

ただ、課題として挙げられるのは、感情的に怒ってしまった後に、謝れていないということです。そこをどういうふうに捉えるかということを、これから考えていかなければならないということが重要です。

次のページをめくっていただきまして、今度は、子どもとの関わりの中で、どのような心がけをしているかというような部分で見していきます。

やはり子どもとの関わり時間が短いと、傾聴が減少していった、かつ褒めるに比べて叱る機会が多くなっているということでも、ゆとりがあるかどうかということだと思います。

例えば、顕著だなと個人的に面白いなと思ったのは、スライド20の左側になります。



「子どもの話に口を挟まず、最後まで聞く」ということです。親の立場からすると、子どもの話はなんとなくオチが読めてしまうというのが実際のところだと思いますが、それをどこまで聞けるかということです。逆に言うと、長時間層の方は、大体できているのが半数以上。逆に短時間層の方で「だいたいできている」で約50%ですから、オチを早く言ってほしいというか、それだけは焦りというか余裕がないということかもしれません。

ただ、もう一つ捉えなければいけないのは、最近「コスパ」「タイパ」とかいう言葉がSNSなどで出てきていますが、短い時間で結論を求めがちで、もしかしたら、そういうところも子育てに影響があるんじゃないかなと、数字から推測という形で挙げさせていただきました。

といっても、時間が若干迫っていますが。はい。

関わり時間が少ない家庭・親子関係の傾向



「子どもがポジティブな感情を得やすい助長の声かけ」よりも、
「子どもがネガティブな感情を得やすい命令の声かけ」が多くなる傾向が見られる。

次シート、質問「子どもに対して、どんな声かけをよくしますか？」

特によく声かけするものを以下より3つまで選んでください」での選択肢(声かけ)を「助長の声かけ」と「命令の声かけ」に分類し、それぞれの選択された平均値と標準偏差値を「子どもとの関わり時間別」に算出した。

助長の声かけ＝「えらいね」「ありがとう」「がんばったね」「すごいね」「やればできる」
命令の声かけ＝「勉強しなさい」「早くしなさい」「いうこと聞きなさい」「なんでできないの」
「しっかりしなさい」

21

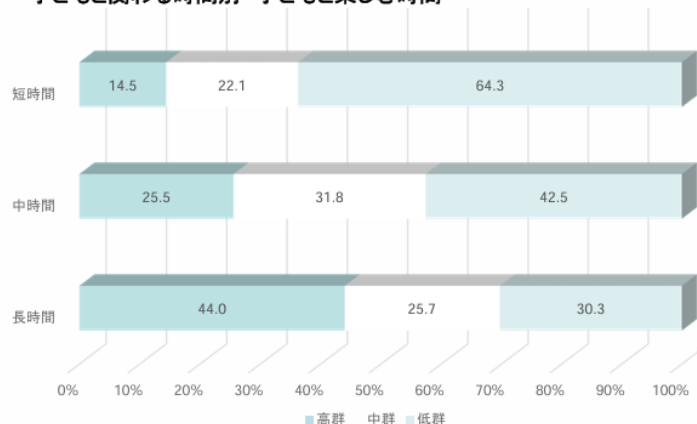
スライド21をご覧ください。「子どもがポジティブな感情を得やすい助長的な声かけ」よりも、「子どもがネガティブな感情を得やすい命令的な声かけ」が短時間層のほうが多くなるということです。長時間ふれあっているご家庭、親御さんであれば助長的な声かけができていて、逆にネガティブな命令口調になってしまうのは、やはり短時間の家庭ということが見えてきたわけです。

ページを少し飛ばしていきますが、スライド24をご覧くださいできればと思います。

関わり時間が少ない家庭・親子関係の傾向



子どもと関わる時間別 子どもと楽しむ時間

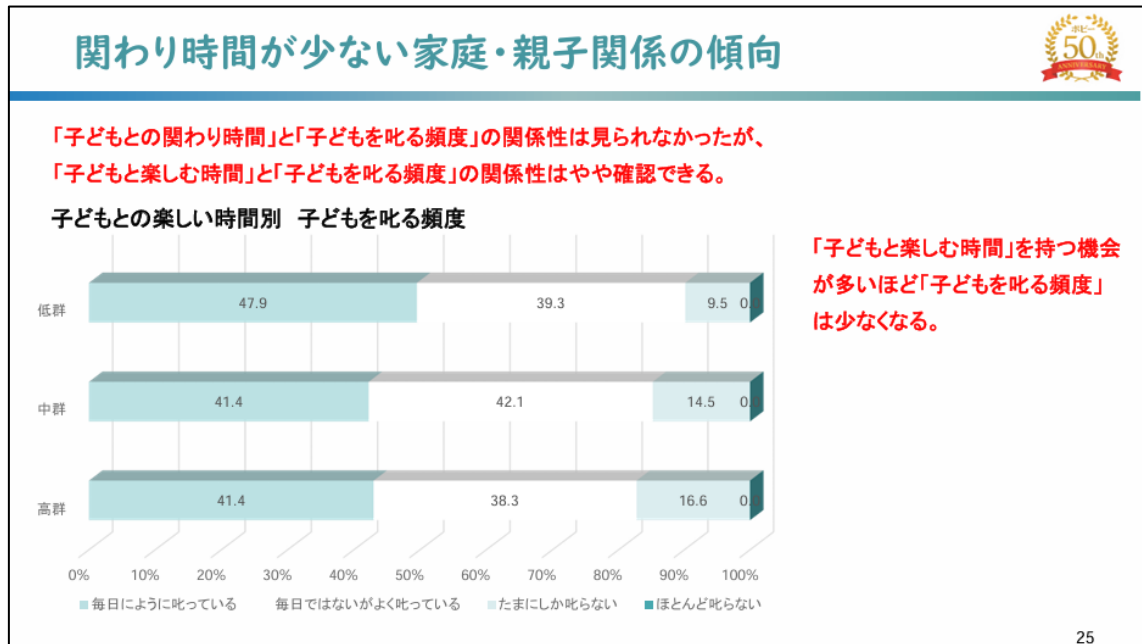


子どもとの関わり時間が短くなると、
「子どもと楽しむ時間」を持つ機会も
少なくなる傾向が見られる。

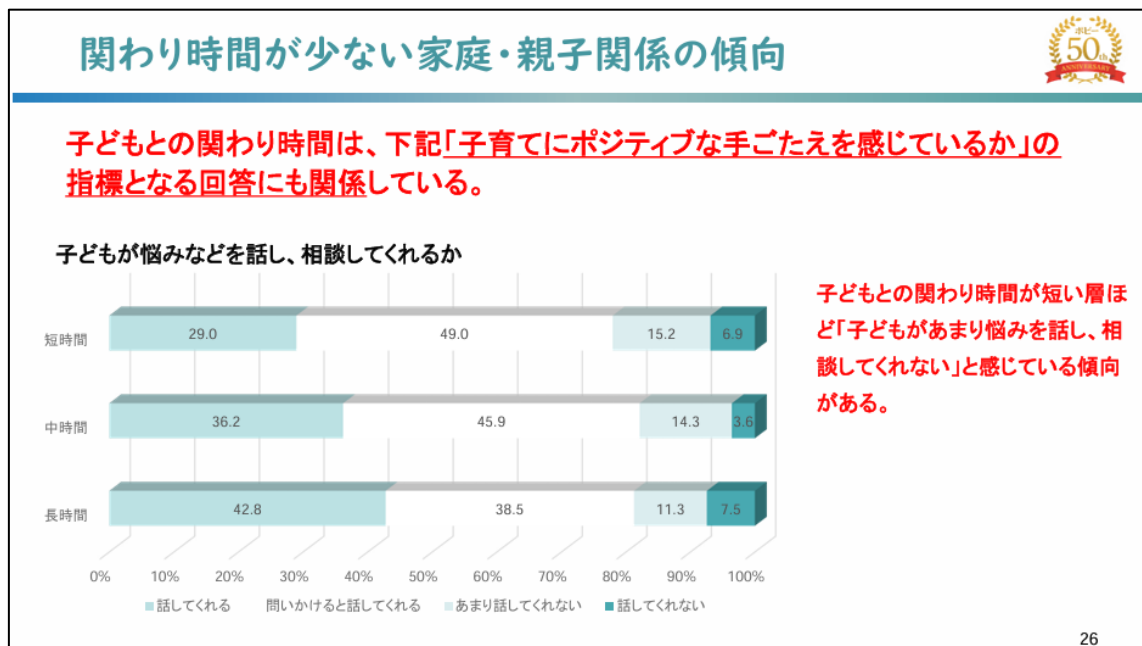
24

子どもとの関わり時間が短くなると、子どもと一緒に楽しむ機会も少なくなる傾向が見られました。

また、スライド25になりますが、子どもと楽しむ時間が減ると、子どもを叱る頻度が上がるということです。子どもと楽しむ時間が多いほど、子どもを叱る頻度は少なくなっているというのも一つデータとして見えてきます。



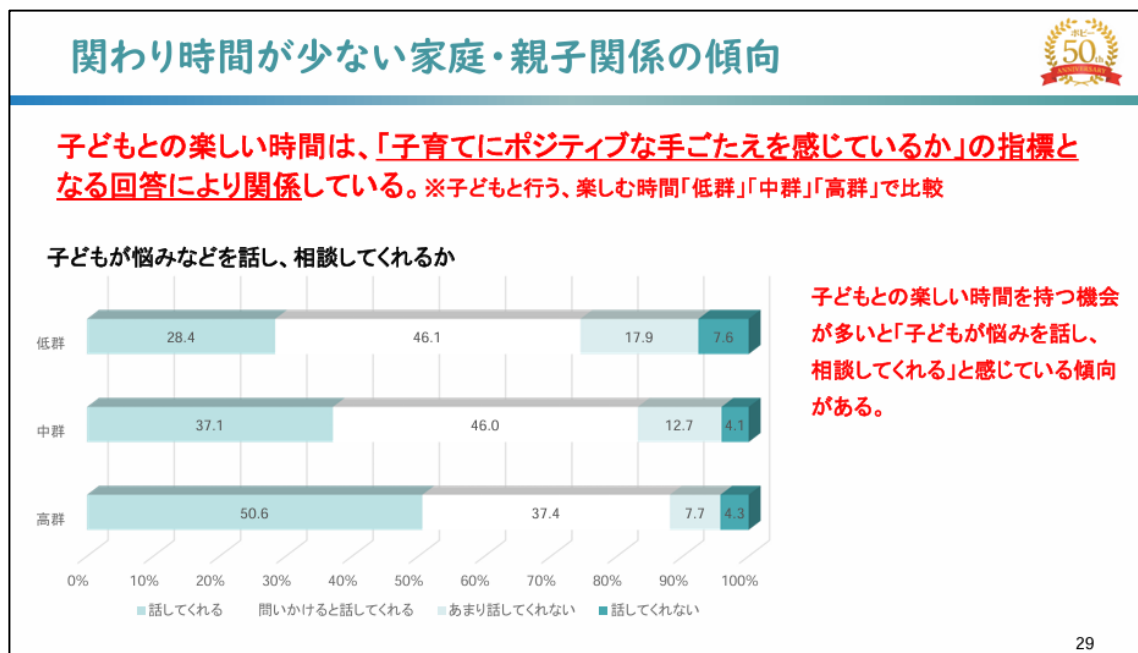
また、スライド26を見ますと、子どもとの関わり時間が短い層ほど、子どもがあまり悩みを話し、相談してくれないと感じている傾向があるということです。



これはいくつか推測できますが、例えば、関わる時間が短いことによって、子どもの変化に気づきにくいのではないかとということが1点目です。あと、もう一つは、子どもが親に気を使っているという可能性が推測できるということです。

親御さんとして「あまり悩みを話してくれない」と感じていて、かつ、子どもが親に気を使っているということに気づけば、もしかしたら、そこに新しいアプローチをすることによって、こういうものは改善できるかなと推測できるわけです。

ページをめくりまして、スライド29をご覧くださいだと思います。



「子どもとの楽しい時間は、『子育てにポジティブな手ごたえを感じているか』の指標」となる回答とも関係しているということで、ここでいくつか挙げておきたいことは何かというと、やはりあの楽しい時間を持つ機会をどれだけ多くできるかというのが、悩みを話してくれる機会へと結ばれますし、それはある意味、そのような機会があるということを、子どもと接する時間が必然的に長くなる、つまりふれる時間が長くなるので、自然に入ってくるチャンスも増えるということが、見えてくるのかなというところなんです。

少しめくって、スライド33に行きたいと思います。

時間が少ない中でも、良い親子関係を築くポイント

【分析方法】
下記3つの軸でクロス集計を行った。
軸1：子どもとの関わり時間3グループ（短時間・中時間・長時間）
軸2：姿勢・行動
4レベルの選択肢を持つ質問項目.5～9、12、15、17～20、22、23の回答を、それぞれ下記2つのグループに分割。
上位2グループ：各質問に対し、「あてはまる（している等）」「少しあてはまる（だいたいしている等）」を選んだグループ。
下位2グループ：各質問に対し、「あまりあてはまらない（あまりしていない等）」「まったくあてはまらない（ほとんどしていない等）」を選んだグループ
軸3：手ごたえ
前シートの3質問に関しても上位、下位の2グループに分割。
↓
「子どもとの関わり時間×第2軸回答グループ」ごとに、第3軸で上位グループに入る割合を算出。
(例：関わり時間が短い、かつ子どもをほめてることが多いグループのうち、何％が子どもは悩みなどを話し、相談してくれると感じているか)

33

この後のデータですが、いろいろたくさん出てきますが、結論的なことを申し上げますと、やはりふれあう時間が短いとしても、しっかりとやることをやっている、つまり子どもに対して的確な姿勢や行動をとっていれば大丈夫ということが、データから見てきたところです。

例えば、ページをめくってスライド36のデータを見ていただければと思います

時間が少ない中でも、良い親子関係を築くポイント

軸2：園や学校など、一緒にいない時間での出来事を子どもから聞いているか
上位G：ほぼ毎日聞いている、ある程度聞いている／下位G：あまり聞けていない、ほとんど聞けていない

子どもは悩みなどを話し、相談してくれるか？（軸3）

グループ	割合
関わり時間短・軸2上位グループ	66.99%
関わり時間短・軸2下位グループ	34.21%
関わり時間中・軸2下位グループ	46.77%
関わり時間長・軸2下位グループ	41.18%

0.00% 10.00% 20.00% 30.00% 40.00% 50.00% 60.00% 70.00% 80.00%

■ 軸3で上位（話してくれる・問いかけると話してくれる）に入った割合

36

が、関わる時間が短いとしても、例えば、当てはまる、少し当てはまるということ

で、ポジティブな行動をしている場合には、実は中時間でも長時間でもあまりやっていない人たちよりも、数字上は高くなってくるというのがポイントになってきます。

その後のデータもほぼ同様です。要は、短くてもしっかりとした行動をしていると数字が上がっているということです。

では、関わりが短くてできていない層、中時間でできていない層、長時間でできていない層で、何か面白いものは出てこないかなと思っていろいろ見てみたのですが、あまり出ませんでした（笑）。

ただ、なんとなく山型であったり、谷型になっていたりするのがかなり多いです。ただ、ここについては、これからもう少し細分化してやりたいところですが、ちょっとそこが難しいところで、今後の課題ではあります。

逆に山型のところと谷型のところ、また、逆に右肩上がり、逆に右肩下がりがありますが、その違いを比較していくと、また新たな視点が見えてくるかなと思いました。かなりページの方、飛ばしさせていただきます。

スライド72まで飛んでいただければと思います。

時間が少ない中でも、良い親子関係を築くポイント



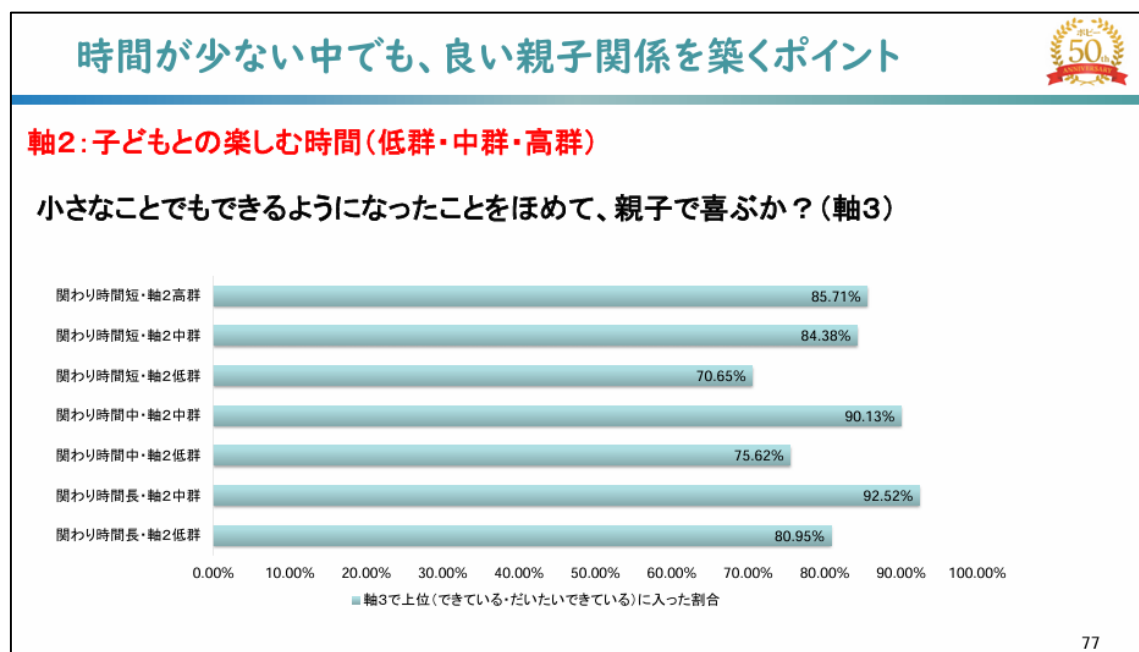
「子どもと行う、楽しむ時間を持てているか」と、「子どもに共感する、子どもをほめる、はげます」といった「子どもへの接し方」との関係性も見られた。

子どもとの関わり時間が短くても、「子どもと行う、楽しむ時間を持てている」保護者は、

- ・子どもが困っているとき、子どもの気持ちによりそって一緒に考えるよう心がけている
 - ・がんばってもできなかったとき、はげます
 - ・子どもをよくほめる
 - ・小さなことでもできるようになったことをほめて、親子で喜ぶ
- などができている傾向が強い。

つまり、子どもとの関わり時間が短くても、子どもと楽しむ時間を持てる保護者の場合には、子どもが困っているとき、子どもの気持ちによりそって一緒に考えるよう心がけていたり、または、頑張ってもできなかったときには励ましたり、子どもをよく褒めたり、一緒に喜んだりなどができている傾向が強いということです。時間も大切ですが、一緒に何かやったというような機会を創出することが大切かなというのが見えてきたところでございます。

次は、スライド73以降ですが、時間のこともありますので、簡単に申し上げますと、高群の方が高い状況になったということです。



スライド77も含めて、ただ一緒にいればいいというわけではなくて、やはり一緒にいることも大切ですが、その内容、あえてひと言で言いますと「質」という言葉でまとめてはいますが、「質」の部分についても、重要に置いておく必要があるかなということでした。

ということで、スライド８９ですが、今申し上げましたように、やはり時間という「量」よりも「適切な姿勢」「行動」という内容「質」を重視して行くべきではないかなということが、今回の調査から見てきたことです。

時間が少ない中でも、良い親子関係を築くポイント



子どもと関わる時間が短くても、適切な姿勢・行動を示すことによって…

- 子どもは悩みなどを話し、相談をする。
- 子どもの落ち込みや悩みなど、変化に気づきやすい。
- 子どもと交わす約束を子どもが守る。

子どもと関わる時間が長くても、適切な姿勢・行動を示さないとよい関係性が築けない。

ポジティブな声かけなどが子どもとの関係にプラスに働く。

→時間(量)よりも適切な姿勢・行動という内容(質)を重視すべき！

89

最後、若干気になっていることがありますので、スライド９６をご覧くださいければと思います。

全家研運動展開への反映



参考ではあるが、７年前調査との比較では、「ほめる」など、子どもとの関わり方が希薄になってきている傾向が見られる。

	幼児	小学
できて当たり前のようなことでも認め、ほめているか	↓	↑
できるだけ、その場ですぐにほめたり叱ったりしているか	↓	↓
友達やきょうだいなどと比べないで、その子自身の良さを認め、ほめているか	↓	↑
抱きしめるなどのスキンシップを心がけているか	↓	↓
朝夕の挨拶や「ありがとう」などの言葉を交わしているか	↓	↓

課題：忙しく、「子どもとの関わり時間」もあまり持てない保護者に、どのように「質の高い関わり」の認知を広げていくか、機会の提供を行うか。

以下シートで、関わり時間(短中長)別に、情報収集手段、生活リズム、興味・問題意識の対象を比較する

96

前回7年前の調査と比較しますと、幼児が下がっていて、逆に小学校で上がっている部分があります。幼児がなぜ下がったのかについては、これから注目しなければならないのかなということで、いろんなことが考えられます。例えば、幼児のときにできなかったが小学校になってできたみたいな、つまり後になってできるようになっているみたいなパターンかもしれませんし、全体的に下がっているという可能性もあるかなということで、幼児の方がすべて下がっていることについては、怖いというわけではないですが気になりましたので、あえて最後の方に付け加えさせていただきます。

すみません。討論の時間まで踏み込んでしまいましたが、取り急ぎ佐久間からは以上になります。

○品川 佐久間先生、ありがとうございます。佐久間先生の発表に対しまして、村松先生からご質問が届いておりますので、村松先生の方からよろしいでしょうか。

○村松 はい。今、佐久間先生の方から96のスライドについてお話しいただきました。時間が少なくても質の高い関わりということで、佐久間先生は内容というふうにお話しいただきました。質の高い関わりを意識することが重要と書いてございます。

「質が高い」というのは「内容の高い」ということですが、どういう意味として捉えれば良いのかなと思っています。また、保護者にどう意識させていくといいのか、佐久間先生としてどういうお考えかをお聞かせいただければ幸いです。

○佐久間 はい。ありがとうございます。

「質」という言葉でまとめてしまったのですが、具体的にこれというのは正直難しいかなと思います。というのは、正直、理想の家庭像、子育て像があると思いますので、例えば、一般的に考えられている子育て像よりも高いレベルを求めてしまう可能性もあります。逆に全然できてないというのは少し失礼な言い方ですが、やりたくてもやれない家庭が少し頑張ったというのも質の向上と取ることもできます。

例えば、接する時間が短い保護者の方であれば。これまでやってきたことに工夫、プラスアルファを加えるとすごくいいかなと考えたところです。例えば、一緒に

本を読むのもすごくいいと思います。また、一緒に動画を見て、何か話してみるとかもいいですね。最近、よく行列で並んでいる最中に子どもに動画見せているお母さん、お父さん多いですが、一緒に何かを見るとか、それこそ先ほど時短クッキングみたいなことを書いていましたが、一緒に料理をするのはすごくいいと思います。でも、実際に切ったり洗ったりするのは大変だと思いますので、例えば、ボタンを押すだけなど、ちょっとしたきっかけがあればいいのかなと考えた次第です。以上です。

○村松 ありがとうございます。プラスアルファ、一つ何か付け加えるということですよ。そういうふうに（言ってくださると）、私たちも保護者の方にも説明もしやすく、質も高いということで、ありがとうございます。

もう一つ質問させていただいてもよろしいでしょうか。

○佐久間 はい。

○村松 全体の中で小さいことを、小さな成長を見逃さないようにするためと書かれていますが、小さなこと、小さな成長を見逃さないようにするには、保護者はどうすればいいのかなということ。また、私たちの立場から言うと、どうアドバイスすればいいのかなということで、佐久間先生のお考えとお聞かせいただければ幸いです。

○佐久間 ありがとうございます。教職の授業で、よく学生に「隣の人の悪いところを10個言いなさい」と言うのですが、たいていすぐに、例えば「服が変」とか言います。逆に「その人のいいところを探しなさい」と聞くと、結構時間がかかります。私たちもそうですが、人に対してディスるというか、簡単な悪口って言えると思いますが…。例えば、あえて子どもの褒めるところを日々探すという努力をしてみるのもいいのかなと思っています。

ただ見ているだけではそういうチャンスは生まれませんので、一緒にやってみて、「できたね」「よかったね」ということをやるというのも一つポイントかなと思います。助長的な言葉が出るような環境を、保護者の方が作るということをいちばんやる必要があるのかなと思いますので、本当にボタンを押すだけでも、食器を片付けて、

食洗機に入れるだけでも、何でもいいので褒める機会を作ってあげるというのがポイントかなと考えました。以上です。

○村松 ありがとうございます。「褒めるところを探す」キーワードとして、私は、先生のお話から「一緒に」というのがキーワードであるという気がいたしました。ありがとうございました。

○品川 村松先生、ありがとうございました。こちらの発表に関しまして、遠藤先生、いかがでしょうか。

○遠藤 貴重な分析結果のお聞かせいただきまして、誠にありがとうございます。

非常に興味深い結果と解釈ということで、特にいろんなところが興味深いものだったのですが、一つはやはり、叱るということと怒るということですね。子どもに対して「叱る」と「怒る」というのが、ときどき大人の中でも同じような意味で捉えられているところがあります。当然なのですが。叱るというのと怒るというのは意味が違っている、機能というか子どもに対する影響も違っているという中で、その怒ったときに、言ってみれば、その親自身が感情的にアップセットしたときに、その感情をどういうふうに制御することができるのかがすごく重要で、今回は反省するということで分析がなされていたかと思うのですが、まさにその叱った後の反省というのが、実は親子関係においては際立って大切なものとしてあるとも考えられるような気がします。

心理学の世界では、よく子どもがその健康な心の発達を遂げていく上で、いつも親御さんは明るい笑顔を子どもに対して示していればいいのか、あるいは穏やかな声で接していればいいのかというと、必ずしもそうではないということが明らかになっています。ポジティブな感情ばかりが家庭の中であふれているというのは、実は非常に不自然な状況であり、逆にオープンコミュニケーションが成り立っている状況では、すなわちプラスの感情があると同時に、マイナスの感情というのもごく自然にオープンに交わされる状況の中で、子どもというのは健康な心の発達というのを遂げていく、そういうことが知見として得られているような気がします。

怒りっぱなしではいけないわけで、そこでやはり親自身が反省して謝るっていうことがどれくらいできるかというところが重要になると考えられます。そこが一つ、親子関係の修復というところ、あるいは、家庭全体のその感情的な雰囲気というものの維持というところにおいては、際立って大切な役割を果たすんだろうなど、調査結果を見させていただきながら感じたところでした。

あと、今回は特に父親と母親というところで分けて分析ということではなかったと思いますが、女性の就労率が高まる中で、特にお母さんと子どもが一緒にいる時間がどんどん短くなっていく…、これは社会の流れから必然と言えるかと思います。ただ一方で、父親の子どもと接する時間、一緒にいる時間に関して言うと、実は減っているというよりは、逆に若干増えているとも言われています。それはおそらく、コロナ禍という状況の中で在宅勤務が広がりを見せて、さらにはワークライフバランスという考え方が社会に浸透する中で、帰宅時間が比較的早くなっているという中で、平日でも意外に父親と子どもが一緒にいる時間そのものが、むしろ少し前よりは増えてきているとも言われるのかなという気がします。

そういう状況の中で、父親が子どもに対して、どんな働きをしているのかというところですね。もしかしたら、子どもは母親に求めるものと父親に求めるものに違いがあるのかもしれないという…。そういうことを考えると、父親と子どもの一緒にいる時間というのが、それなりに確保されつつある状況の中で、父親が今後どういうふうに家庭の中での育児やあるいは子どもとの関係において貢献できるかというところが、一つの鍵になるのかなと感じるところです。

今後、もし可能でしたら、父親と母親というところを少し分けた形で分析などをさせていただけると、さらに今後の親子関係を占うこともできるのかなと思いながら聞かせていただきました。

結果はいずれも興味深いところですが、特に、「質」という部分…、接する時間が短くても、佐藤先生のお言葉では「濃い」という表現が使われていたと思いますが、やはり時間そのものは短くても、いかにその濃い関係というものを構築して維持することができるというところが非常に重要であるということを、改めて感じた次第です。

どうもありがとうございました。

○品川 遠藤先生、ありがとうございました。それでは最後に、佐藤先生、いかがでしょうか。

○佐藤 こういう調査は何回かやったことあるのですが、例えば、学生に対してもやったことがあります、「子どもの頃に『勉強しなさい』とよく親に言われたか」という質問をしてみます。すると、「イエス」という回答が出てきますが、それは親から言われたことに対して「イエス」と答えるのですが、「ノー」という人もいます。「ノー」はなぜかという、自分で勉強しているからです。だから親に言われなくていいのです。だから「ノー」の回答が、本来の意図から分かれてしまうわけです。勉強しないから言われたのか、勉強しているから言われなくていいのかとか、そんな感じでごちゃごちゃしてしまうとかあります。だから、この中でもいろいろあります。

子どもに関して「できてほしいこと」というのが、子どもの自立性の問題と親の働きかけとは関係があります。繰り返しになりますが、短い時間の中でも子どもがある程度自立的だから関わりがあまり濃くない場合もあるということも考えられなくはないと。はっきりとは言えませんが、その辺が少し気になるのと、あと前回の調査で、親の方はしつけをしたつもりになっている場面が多いです。ちょっと変な名称で「つもりのしつけ」と言います。「やっています」と言うのですが、当時、親と子のデータはマッチングしているんです。そうすると、親はやっている人もいますが、子どもから見えてやってないという。

あと、学校、家庭、地域のいわゆるしつけの役割分担は、親と先生はほとんど回答差がないのです。ですから、先生や学校の教員から見ると、保護者がこんな基本的生活習慣のしつけをやってくれないから、学校で雑巾しぼりをやる、箸の持ち方を指導する…となる。親の方はちゃんとやっているつもりなのですが。その辺にズレが出てくるのです。

今回、親と子どもの関わりの時間の長短でいっても、長い層の方は比較的「つもり」になっている可能性がなくはないかなと思っています。時間的にゆとりがあるから、いろいろやって子どものためにやってあげているみたいな…。そういうところもなくはないですから。短い層の方は、短い時間の中で「ああしなきゃ」「こうしなきゃ

や」という。そうするとちょっと命令的に声をかけてしまう。できないことをちゃんと良くしたいから。長時間層の人はできないことを良くしたいというより、感情的に褒めるような意味で「褒める」と答えているのかなというようなことがありました。

あと一つだけ質問いいですか。14 ページです。

その中の「適切なタイミングで褒めることができていない可能性」の「適切なタイミング」をどういうふうに解釈したらいいですか。具体的に。

○佐久間 要は、ふれあっている時間が短いので、例えば、見ていないってことです。一つは物理的に目の前になくても見られなかったというパターン。もう一つは認識できてないということです。つまり、褒めなければいけないことを認識できてない、余裕がなくて認識できてないという意味です。ということで、適切なタイミングで褒めることはできてないということになります。

○佐藤 ありがとうございます。以上、わかりました。

○品川 はい。ありがとうございます。その他の先生、あの質問大丈夫でしょうか。

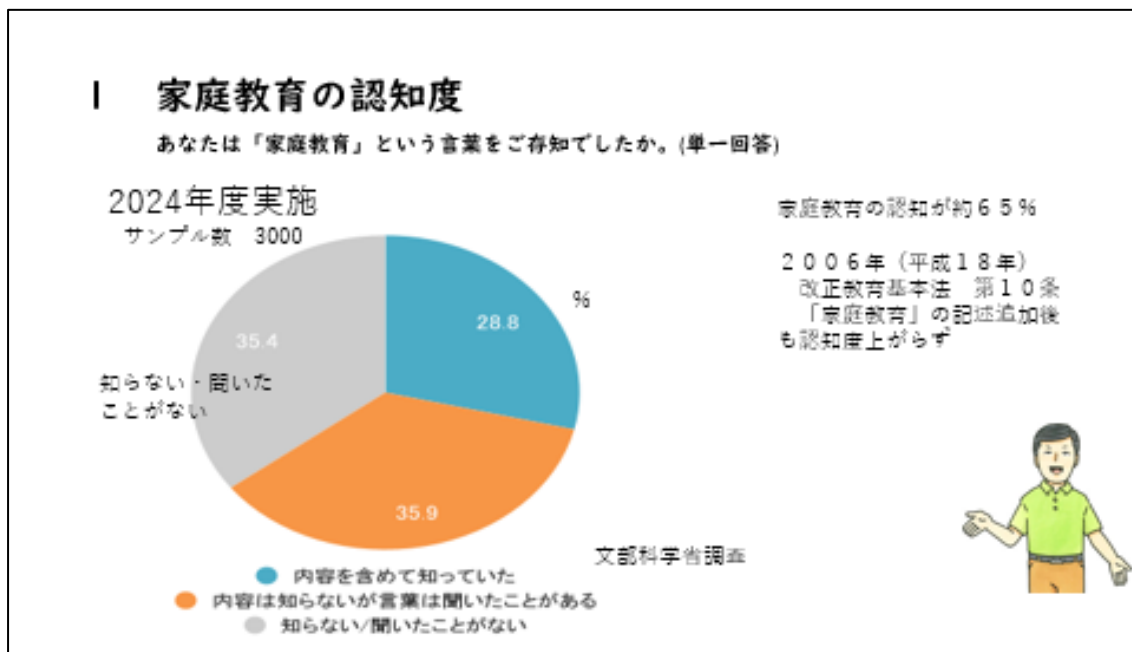
お待たせしましたが、次、村松先生に移りたいと思います。よろしくお願いいたします。

5. 【テーマ2】家庭教育の現状と今後の子育て支援の在り方<村松 守夫先生>

○村松 はい。私の方からは、「家庭教育の現状と今後の子育て支援の在り方」というテーマをいただいております。資料を用意していますので、スライド形式ですが、見ながらと思っております。

1 枚目はテーマです。2 枚目に内容を書いています。家庭教育の認知度、家庭教育で大切にしていること、保護者が学校に望んでいること、子どもとの関わり 専業と共働き、先ほども佐藤先生の基調提案の紹介でありましたが。それから、子育てに関し

での情報収集、ポピー教育相談の現状で、これからの子育て支援ということで、10分程度でお話をしたいと思います。



ページめくっていただいて、3枚目のスライドです。「1 家庭教育の認知度」ということで、文部科学省が、毎年、委託して実施している調査があります。実施したのが2024年と最近ですが、全国調査で3000のサンプル数で、「家庭教育という言葉をご存知でしたか。」ということ聞いてみると、「知らなかった」「聞いたことがなかった」が35.4%もいるということで、私も教員をずっとやってみて、「学校教育」「家庭教育」「社会教育」は当たり前のように言ってきたように思います。「家庭教育」という言葉も当然もう少し認知度が高いと思っていましたが、1/3の人は知らないし、聞いたことがないと。そして、1/3ぐらいの人が内容を含み知っているということです。

昭和22年に教育基本法ができて、そして2006年、平成18年に改正教育基本法ができ、第10条に家庭教育の記述が追加されました。スライド4番に、一応家庭教育についての第10条を載せておきました。

簡単に言いますと、第一義的責任は父母が持っているということ、そして、家庭教育では生活のために必要な習慣とそして自立心を育成し、心身の調和を取れた発達ということが書いてあります。また、付け加えということで、国及び地方公共団体等

は、学習の機会及び情報の提供を努めなければならないということが書かれています。

Ⅰ 家庭教育の認知度

2006年（平成18年）

改正教育基本法 第10条「家庭教育」

父母その他の保護者は、子の教育について**第一義的責任**を有するものであって、**生活のために必要な習慣**を身に付けさせるとともに、**自立心**を育成し、**心身の調和のとれた発達**を図るよう努めるものとする。

2 国及び地方公共団体は、家庭教育の自主性を尊重しつつ、保護者に対する**学習の機会及び情報の提供**その他の家庭教育を支援するために必要な施策を講ずるよう努めなければならない。



そのことを踏まえて、家庭教育で大切にしているということで、先ほどの文部科学省の調査委託調査ですが、その中で1939人、家庭教育について「内容を知っている」「聞いたことがある」という人たち1939人の中で「何を大切にしているか」というのが載っていました。出てきたもののトップは、挨拶やマナーなど社会規範、そして2番目に規則正しい生活習慣や生活能力を身につけさせるということになっています。そして、3番目に物事の善悪、いわゆるルールやマナー、しつけに関する部分が、家庭教育を大切にしていると出てきています。

私たちは保護者からのご相談に乗る立場ですが、親子家庭のふれあい、団らんを持つことも出てきていますが、ベスト3には入っていないという状況です。やはり家庭教育で大切にしていることの認識としては、しつけ、マナー、ルール、その辺のいわゆる基本的生活習慣の方を重視しているというのが多いと思っています。

3 保護者が学校に望んでいること

コミュニティ・スクールを推進した学校でのアンケート結果
(小平一小 小平五小 小平六小 小平十四小)

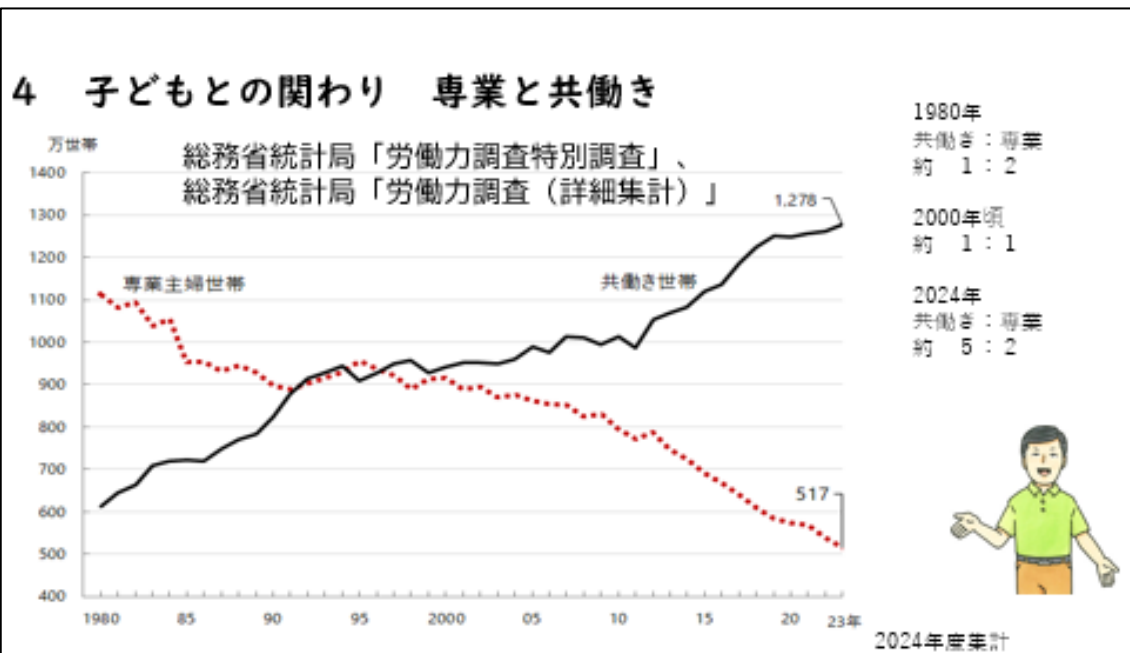
＜保護者が学校に一番望むこと（単一回答）＞

- | | |
|----------------------|-----|
| ①子どもの個性を伸ばし意欲を引き出すこと | 23% |
| ②一人一人の子どもをよく理解すること | 22% |
| ③子どもの安全を守ること | 13% |
| ④確かな学力が身につく授業をすること | 12% |
| ⑤集団生活のルールを身につけさせること | 11% |



3 番のところ、スライド 6 になります。私は学校で管理職を 19 年ほど務めました。小平ですが、コミュニティ・スクールを推進してきました。小平第六小学校で最初コミュニティ・スクールを推進して、そのときは副校長でしたが、その後に十四小、五小、一小と 3 つの学校でコミュニティ・スクールを推進しました。そのときに保護者や地域の人たちにいろんなアンケートをとりましたが、4 つの学校で同じ内容にしました。その中で「保護者が学校にいちばん望むことは何ですか」という質問に対して、単一回答ですけれども、よく出てきたのは、「個性を伸ばしてください」、「よく理解してください」、「安全を守ってください」、そして 4 番目に「学力が身につく授業をしてください」でした。

当初の予想では学力がいちばんになると思っていたのですが、保護者が学校に望んでいることは、個性を伸ばし、意欲を引き出し、一人一人を理解してもらいたい、あと安全ということが出てきました。家でも取り組んでいるけれど、学校でも同じように取り組んでもらいたいという意味と、家ではなかなか取り組めていないから、「学校でよろしくね」という意味の、両方あるのかなと思いながら、どちらかということを少し考えていきたいと思っています。



ページめくっていただいて、スライド7です。子どもとの関わりについてどうかということで、先ほど佐藤先生からご説明ありました調査の総括の中にありました「子どもとの関わり 専業と共働き」、同じグラフです。

これについて1980年からの統計資料がありまして、実はポピーが始まったのが1973年、昭和48年です。その間の統計資料を探しましたが、ありませんでした。ということは、この資料からわかりませんが、始まった当初は、さらに専業主婦（専業家庭）と、共働き家庭の差は大きかったのだらうなと思っております。

1980年では、共働きが1に対して、専業が2となります。そして1995年には重なり、2000年前後にだいたい1対1の割合になり、2024年、本年ですが、共働きが5に専業が2という割合になっていることがわかりました。この調査だけでは、実はシングルの方たちであるとか、そういうことはわからないので、何かいい資料がないかと思っていましたら、その次、スライド8番の資料になります。

4 子どもとの関わり 専業と共働き

10歳未満の子どもを持ち、パート・アルバイト以外の仕事をしている人（20歳～49歳まで）

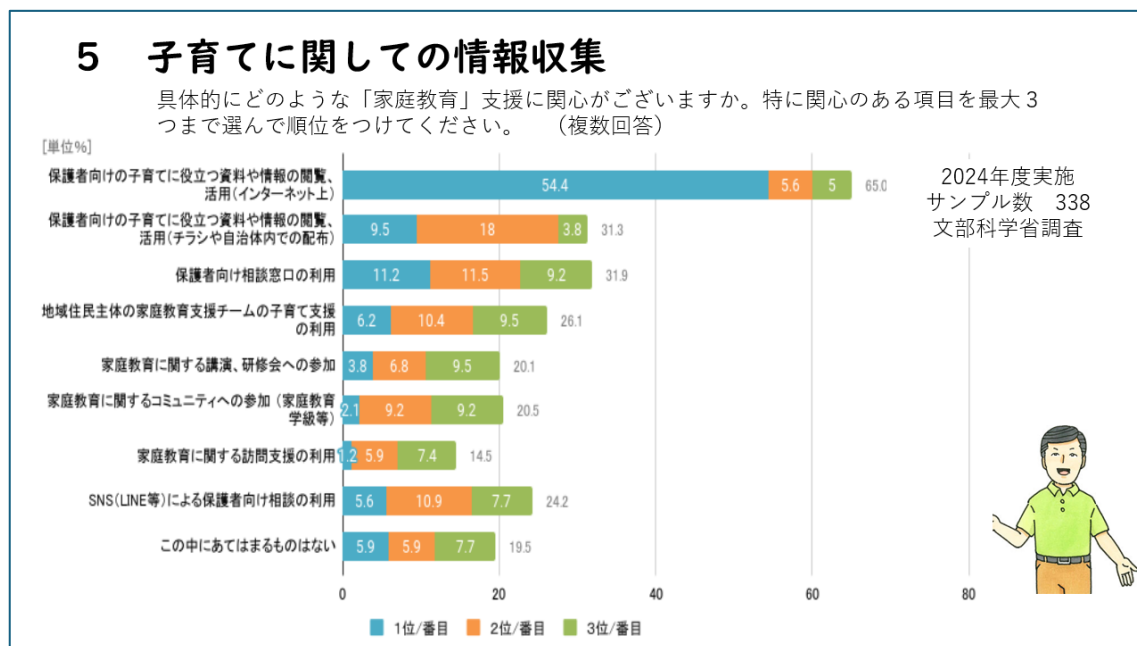


子育て世代の80%以上が、仕事に従事している。



株式会社アシローというところで、3042人に調査したものです。「子どもとの関わり 専業と共働き」ということで、10歳未満の子どもを持つパート・アルバイト以外の仕事をしている人と正規の仕事をしている人、20歳から49歳までを抽出したのですが、その中で74.5%、3/4が共働きです。そしてシングルの方、シングルマザーが7.6%、シングルファザーが2.0%と10%近く。そして、配偶者が専業主婦・専業主夫は16%ぐらいしかいないとなっています。上のグラフは、子育て世代だけ抜き取ると、このようにほとんどが共働き、そしてシングルということで、8割以上がそういう実態であるということはしっかり押さえて、これから進んでいかなければならないだろうなと思っています。

文部科学省の調査の中で…、5番です。スライド9になります。

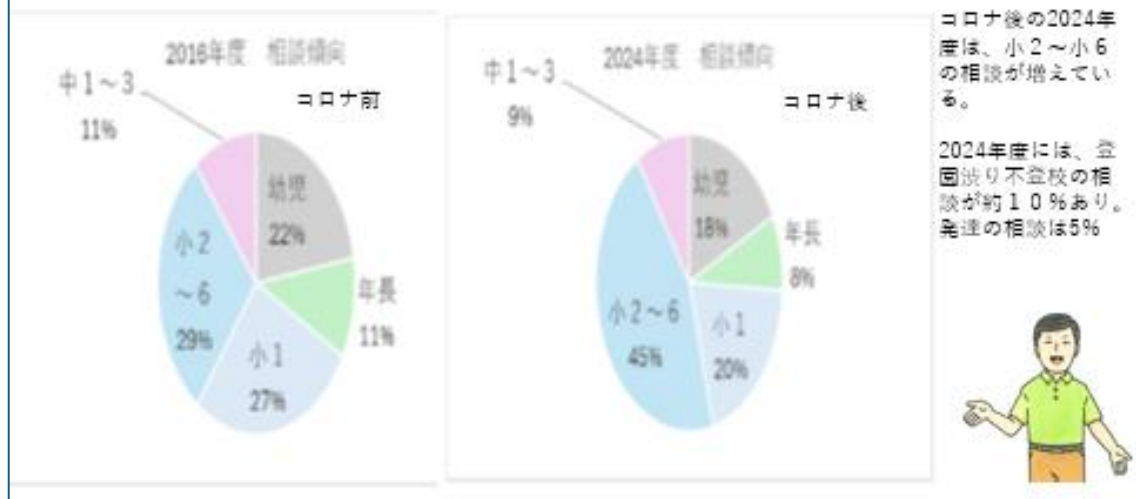


情報収集について、子育ての情報収集のもとになっているのが…、ちょっと字が小さくて申し訳ありません、「保護者向けの子育てに役立つ資料や情報の閲覧、活用（インターネット上）」、いわゆるSNS等を利用したものが情報収集としてはいちばん使われています。青いのが第1位のものです。

これを見ても、ダントツでここがいちばんであることがわかります。インターネット上の情報の閲覧ということで、ここから家庭教育への子育てに関する情報を得ているのです。ですから、ここへの発信というのが、これから重要になってくるだろうと思われます。

また、2番目、3番目等にある、いわゆるアナログ的なものもまだ捨てたものではありません。「保護者向けの相談窓口の利用」もしっかりとありますので、このあたりの充実もしていかなければいけないだろうなと思っています。

6 ポピー教育相談の現状

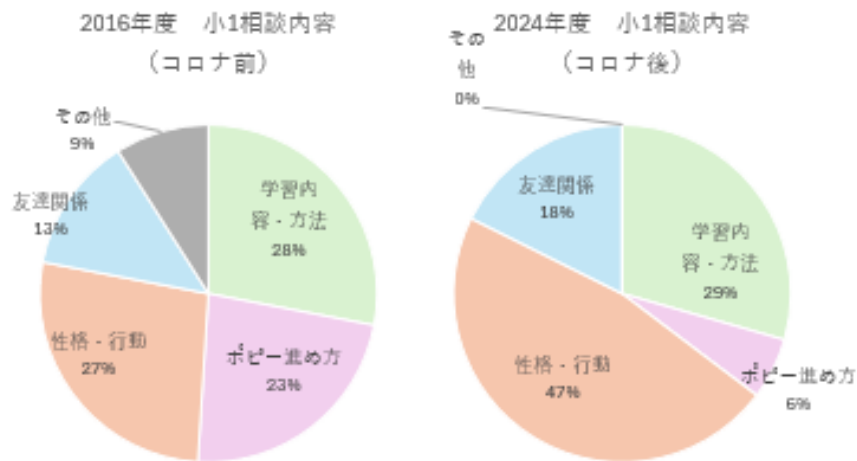


スライド10です。「6 ポピー教育相談の現状」。ポピーでは、私たち対話主事が教育相談を受けています。

少しグラフが薄いのですが、2016年と2024年に統計をとってみました。2016年はコロナ前、2024年、今年度ですが、コロナ後ということで、傾向的には幼児の相談が少し減ってきていて、小学校の相談が増えているということになります。中学生については10%程度になっています。

この中では見えませんが、今年度の調査、いろいろ教育相談の中身を見ていくと、登園しぶりや不登校の相談が約10%ありました。発達の相談、いわゆる発達にいろいろ問題があるのですが、保護者の方が「発達」という言葉を使っている相談は約5%ということです。

6 ポピー教育相談の現状



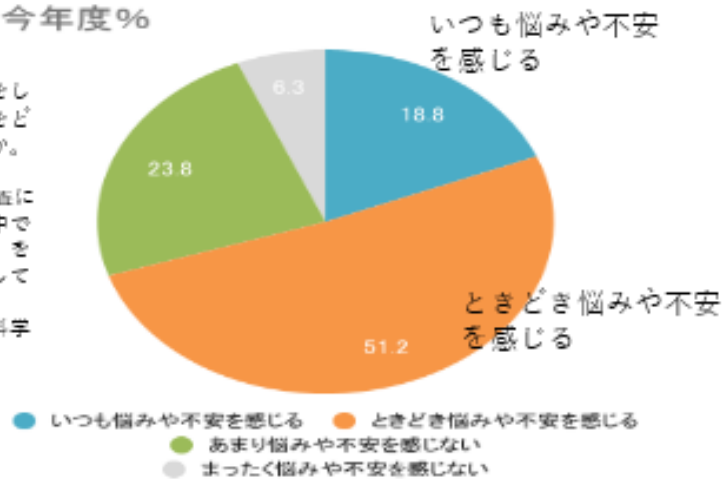
次のページ、スライド11をご覧ください。「6 ポピー教育相談の現状」ということで同じことですが、小1だけ抜いてみました。

「学習内容・方法」については同じぐらいですが、「ポピーの進め方」について、前はいろいろと聞いてくる方が多かったのですが、最近は聞いてくるというよりも、いわゆるお子さんの「性格・行動」についての相談が増えているという傾向があります。お子さんの性格や行動、もちろん親子関係のことも含めていますが、そういうふうになっています。「友達関係」については13%から18%と少し増えていますが、「性格・行動」についての相談の増え方とはまた違ってきます。それぞれ、一人一人の個の対応ということを重視しているのかなと思っています。

6 ポピー教育相談の現状

参考資料 今年度%

あなたは現在子育てを
して、悩みや不安をど
の程度感じていますか。
(単一回答)
※スクリーニング調査に
おいて「現在子育て中
で同居中の子供が
いる」を選択した
方を対象にしている
(n=703)
2024年度 文部科学
省調査



6 番目、スライド 12 です。「6 ポピー教育相談の現状」ということで、先ほどの文部科学省の調査によると、子育てについて「いつも悩みや不安を感じる」方が 18.8% で「ときどき悩みや不安を感じる」が半分ですので、7 割近い人たちが悩みや不安を感じているという現状があります。それにポピーもしっかりと応えていかなければいけないと思った次第です。

7 これからの子育て支援

- (1) 家庭教育の認知・大切さを知ってもらう！
- (2) 家庭教育で大切にすべきことを伝えていく。
- (3) 時間のない中で、どう関わればよいかを知らせる。
- (4) 子育て情報の伝え方を工夫する。
- (5) 10 分よりその親子時間！ おやこ読書を！
- (6) 子育ては、「ほめて みとめて だきしめて」



最後スライド 13、まとめになります。「7 これからの子育て支援」ということで、とにかく家庭教育の認知・大切さを知ってもらうことがまず大事だろうと。どういことを家でやっていけばいいのか、やっていくと子どもたちが健やかに育ってい

くのか。(2)にもありますが、大切にすべきことをきちっと伝えていく。そして、今回の調査の中でもありましたが、時間のない中でどう関わればよいかをきちっと知らせ、そしてそれが、保護者が行動に、また普段の関わりに移せるようにやっていく。その際に情報の伝え方、口頭や電話とか ZOOM とかいろいろありますが、情報の伝え方、ネットも上手に活用しつつ、対面も上手に利用し、そういうふう子育て情報の伝え方を工夫していく。保護者、親のニーズに合わせてやっていくということが大事だろうなと思っています。

あと、「10分よりそい」ということで、ポピー全家研では話をしていますが、親子時間、10分よりそいの親子時間をしっかり大切にしていく。それを大切にすると、時間が短い中でも子育てにうまく関わって、子どもたちが健やかに成長するよ、ということです。

例えば、「読み聞かせ、親子読書を寝る前の5分間やってみたらどうですか？」ということで、それをやれば、まずはふれあい、寄り添うことができるということが考えられます。

最後、まとめになりますが、子育ては「褒めて認めて抱きしめて」。これは矢印じゃなく、並行して進めていくわけですが、これをしっかりと訴えていく、これが必要だろうなと思っています。

時間になりました。以上でございます。

○品川 村松先生、ありがとうございました。今の発表につきまして。遠藤先生、いかがでしょうか。

○遠藤 貴重なご発表、誠にありがとうございました。まさに家庭というところでの親の役割などに関して分析結果に基づきながら、非常に興味深いお考えを聞かせていただいたと認識しています。

家庭での教育が、子どもの発達に何をもたらすかといったときに、おそらく、親御さん自身が何を自覚しているかというところが重要になるような気がします。

一般的に、ご存知のように、現在、全世界的に非認知的な能力、非認知的な心の発達に注目が集まっていると言えるのかと思います。OECDなどはその非認知能力を

「長期的な目標の達成に関わる心の力」と「他者との協働に関わる心の力」と「感情の管理制御に関わる力」の3つに分けているわけですが、私自身、国立教育政策研究所などでこの非認知能力の日本の子どもの実態調査などに加わらせていただいています。そこではシンプルに非認知能力を「自己と社会性の力」と言い換えています。

「自己に関わる心の力」は、平たく言えば自分のことを大切にして、自分のことを適度にコントロールできて、自分のことをもっともっと良くしよう、高めようとする力です。

一方、社会性というのは何かというと、人との関係をつくって維持していくための力、あるいは集団に溶け込む力、もっと平たく言えば、人とうまくやっていくための力になるのかと思います。

そして、この自己と社会性、あるいは非認知と言われている心の力の発達に大人からどういう働きかけが必要かといったときに、よく言われているのは、子どもが感情の当事者であるとき、言ってみれば、子ども自身が悲しんでいたたり怒っていたり、あるいは非常に喜んでいたりするときなど、何らかの感情の真っ只中にあるそのタイミングで、周りのいちばん近くにいる大人、当然家庭ではお母さんやお父さんということが多いと思いますが、そういう存在が、そのタイミングでその感情にしっかり向き合って、そしてその感情に共感を寄せる。そして、崩れた感情の場合は、それをしっかり立て直してあげること、ある意味、こうした日常的に頻繁に生じるタイミングでの働きかけや関わりという中で、身につくものがこの非認知能力、つまりは自己と社会性の力だと心理学的に分析されているのかなという気がします。

ただ、もしかしたら親御さんは、実際、まさにその子どもの感情の当事者であるタイミングでいろんな働きかけをして、そういう心の力を、子どもの中にしっかりと備えさせていることがあるのかもしれませんが、おそらくそういうところに関しては、意外に自分の役割を自覚していないところもあるのかなとも思います。

そういう意味で、親御さんの一つの意識という部分で、わりあい社会的に価値づけられたようなことに関しては子どもに自分自身がどんなことをしてあげられているかについて意識が向くのかかもしれませんが、人間として当たり前の人の心の力に対する自分自身の寄与みたいなことに関しては、意外に無知覚なところがあるのかなということをお示しいただいた調査結果などから、少し感じたところです。

あと、このポピー教育相談の現状ですが、2016年と2024年を比較されている中で、特に「性格・行動」に関わる相談が20%増えているという変化についてお話いただきましたが、これはもちろんその関係性も含めてこのカテゴリーの中に入っていると思いますが、何か具体的にわりあいこんな相談が多いんだというようなことがおわかりになりましたら、ご教示いただければなと思いました。

○村松 ありがとうございます。では太田先生（※座談会出席のポピー教育対話主事）の方から。

○太田 不登校・行きしぶりと発達課題。親御さんの方が発達障害についての知識もあるし、かなり早期に診断を受けておられる方も増えているので、そこは多いかなと思っています。

○遠藤 激増の背景に関しては、何か分析されていることがありますか。8年という間の大きい変化というところで、この8年の間に何が大きく変化したのか。親御さんのそういうものに対する知識とか認識というのが広がったということなんでしょうか。

例えば、発達障害に関して、言葉そのものが社会全般に普通に流布するようになったということで、それに対して非常に敏感、あるいは過敏になっているとか、そういうことが一つ関係しているとか…、そういうこともあるのでしょうか。

○太田 個人的にはそのように考え、感じてはいますが、村松の方が、専門性が高いので、どのように分析されるかお聞きしたいです。

○村松 はい。私の方、発達障害ということで直接相談もありますが、そういう相談をされる方というのはネットとかでいろいろ見ている方で、実際に生の声を聞きたい、実際の学校の教員をやっていた先生の声を聞きたいということで、対面ではないのですが、声を通してニーズがありますね。

○遠藤 まさしくネット等での情報の氾濫という部分に振り回されている部分もあると感じていますが、だからこそ先生がああ13枚目のスライドでまとめてくださっている「子育て情報の伝え方」の工夫は、本当に重要なのかなと認識したところです。

言ってみれば、情報がいろんな形で飛び回っていて、それに振り回される中で、確かなものをどう与えていくのかという点が、まさに4番目の子育て支援においては、今の時代、とても大切なものになってきているのかなと感じました。

○品川 遠藤先生、ありがとうございました。佐久間先生、いかがでしょうか。

○佐久間 はい、ありがとうございます。私もスライド11を見ていて、コロナ前とコロナ後ということで、「性格・行動」の部分が増えたと思う反面、「学習内容・方法」「ポピーの進め方」が少なくなったことが気になりました。

というのは、やはりコロナ禍において、自宅学習というか学校に行けない状態があって、自宅学習をせざるを得ない状況の中で、逆に言うと情報の氾濫ですが、いろんな情報を得て自学の進め方を知ったというか、ある意味、学校の勉強に頼らなくてもどうにかできるすべを得てしまったのかなというのはあります。

それが、先ほどのコミュニティ・スクールに直接関係するわけではないですが、確かな学力が身につく授業というのが下がったというのは、それこそ習い事とか塾とかに行って先取りをしてしまっている可能性もあったりして、そういうのが顕著に現れたのかなと推測したのですが、村松先生的はどうですか。

○村松 はい。「ポピーの進め方」が減っているということは、今まではポピーを渡されて、どう使ったらいいのか聞くところがないというときがあったようです。ところが、最近は教材をきちっと見て選んできているところがあって、それで少なくなったのだらうという考えも立ちます。

また、対話主事の方からも、「ポピーの進め方」が減ったことについてちょっと考えがあるかと思いますから、どなたか…。では、太田先生。

○太田 学習の進め方については、それぞれ担当しているのが若干違うのですが、中学生については学び方の質問が増えているかなとは思いますが、トータル、他の質問も多いし、率としては減っているように見えるのかなと思います。

○村松 中学生の教育相談、保護者を通してですが、例えば、中1になったときにどういうふうに学習していけばいいのかとか、そういうことは確かに減るというよりも、若干増えているのだろうなと思っています。はい。

小学生については、やはりもう保護者の方も使い方がわかっていて、わざわざ聞く必要はないとなっていることが減っている原因かなと思っています。

○佐久間 すみません、ありがとうございます。小学校と中学校とでは学習内容が違うので、親御さんが手を出せなくなるとよく伺います。そういうところがあるのかもかもしれませんね。すみません。ありがとうございました。

○品川 佐久間先生、ありがとうございました。では、佐藤先生、よろしくお願いします。

○佐久間 村松先生ありがとうございました。

最初のところで、家庭教育の認知度がこんなに低いことにびっくりしています。「しつけ」という言葉ならもう少し認識が高かったかもしれません。だから、今回、関わる時間の短い保護者が命令的になるのは、しつけをイメージしているからで…。

「しつけ」は漢字で書くと二通りありますよね。「身美しい（躰）」と「仕事の仕と付ける（仕付け）」。これは動物に使う場合もありますし、服装を作るとき、米作るときもあります。共通するのは一定の型にはめ込むことだから、はめ込もうとするとどうしても命令口調になってしまう…、そのようなことも読み取れるかなと思います。だから、「教育」というと嫌がってしまっ…。

家庭教育に関する施策の委員もやっていたのですが、先ほどちょっと言った家庭教育学級の参加者が少なくなっているんですね。なぜかというと、「教育」という2文字に抵抗感があるみたいです。だから、教育ではなく、「親子で料理を楽しみましょう」

とか「親子で遊びましょう」と言うと、参加層が広がるのです。「教育」を外すと。それに、まだ教育に対して堅苦しいイメージがあり、まして家庭で教育することに対して、あまり知られてないのかなと思います。

ヨーロッパに行くと、家庭教育は行政の範疇から外れています。私事ですから。ですので、日本特有なのかなと思います。だから、生涯学習の中でも家庭教育学習という形で無理やりねじ込んだときもあります。今も多分そうですが。そんなことで認知度に関してあらためてデータを見せていただいて、認識変えられないと…。

それで先生の場合、校長経験という前提でお伺いしたいのですが、資料をいただいた中で、子育て世代80%以上が仕事に従事というデータ、さらに、先ほどから話題になっていた「6 ポピー教育相談」の現状で、「性格・行動」に関する問題。ポピーに関わっている保護者の方は、一般の家庭よりも教育にかなり関心があるからだというのを前提にしつつも、その上で伺いしたいのが、今、児童生徒の問題行動で、いちばん数字がよろしくないのが小学校ですよ。暴力問題もずっと増えていきます。中高はちょっとおとなしいんですよ。いじめもそうですよね。

○村松 一応、2年生です。

○佐久間 学年進行とともにただ下がっていくんですね、中高になると。あと不登校が累積的なのですが、小学校から数が増えてしまっています。そういう、いわゆる青少年の問題行動に関することで、小学校ではどうなのか。増加傾向であることと親の関わり方との関係について、目に見えたものがあるのでしょうか。

○村松 不登校等について問題行動…。

○佐久間 不登校、あるいはいじめとか暴力行為ですね。

○村松 はい。私自身も昨年の3月まで現場にいましたので、いじめについてはよく理解しています。最近では、子どもからの情報をもとに保護者がすぐに学校に連絡す

るケースが、以前よりも増えています。特に、「うちの子どもは100%正しい」という姿勢で訴えてくる保護者が増えている印象があります。

私自身、子どもが生まれたときに両親から「子どもの話は話半分で聞かないとダメだよ」と言われました。しかし、現在では、自分の子どもの言うことを100%信じるという家庭が多くなっています。もちろん、以前からそのような保護者はいましたが、(保護者に対して)「実際にはこのような状況でした」と事実を示すと、「ああ、そうでしたか」と納得してもらえることが多かったのです。しかし現在では、学校現場で管理職が「こういう事実があります」と伝えても、「いや、それは違う。うちの子の方が正しい」と反論され、話がこじれそうになるケースが増えています。これはいじめの問題にも関わってくる重要な点です。

不登校については、初期の段階で学校としっかり相談し、担任の先生が敏感に対応することで、早い段階で状況を改善できることが多いです。しかし、学校側が「いつか来るだろう」と考えたり、「少し様子を見ましょう」と消極的な対応をとったりすると、不登校が長期化し、半年や1年を超えてしまい、最終的に小学校6年生まで登校できなくなるケースもあります。「初期対応」と言うと語弊があるかもしれませんが、早期の対応が非常に重要であると感じています。

私自身、校長として最後に勤務した学校では3年間の在任中に不登校の児童がいました。担任の先生も大変な思いをしていたので、私が直接預かって対応したこともあります。短期間で不登校が始まった子どもについては、適切に対応すれば比較的早く解決することもありました。しかし、1年以上不登校の状態が続いている子どもについては、さまざまな方法を試み、関わりを増やしても、なかなか難しい面がありました。そのため、不登校への対応には決まった正解があるわけではなく、多方面からアプローチし、柔軟に取り組んでいくことが必要だと感じています。

長くなりましたが、以上が私の考えです。

○佐久間 ありがとうございます。あと1点、端的にお伺いしますが、不登校なら不登校、暴力なら暴力のいじめなど、そういう傾向のあるお子さんの親は子どもとの関わりはあまり長くなさそうですか。それとはあまり関係ないですか。先生の感覚的に…。

○村松 あまり長くないです。一方的に聞くだけっていう形…。聞いて「ああ！」とすぐ…。

○佐久間 すぐ…なんですね。100%本気にしてしまうんですね。

○村松 そうですね。それは、うちの対話主事に4人の先生いますが、それぞれ聞いていただいても、現職のときのことがあるかと思います。

○太田 私は関係ない感じです。たまたまなのか、傾向なのか…。

例えば、怒鳴り込んで来られる親が実の親の場合でない場合が何件かありまして、今、ニューファミリーが増えているということですが、それはもしかしたら「ちゃんと父親をしているよ」というポジングであるのか、そういう複雑な新しい家庭の緊張感…。そういうのも感じていました。

○佐久間 ありがとうございます。

○品川 ありがとうございます。村松先生の発表に関しまして、よろしいでしょうか。村松先生、ありがとうございます。

それでは、10分間ほど休憩を取りたいと思いますので、よろしくお願いいたします。再開は15時40分とさせていただきます。

○品川 それでは少し予定時刻よりも早いですが、再開させていただきます。

遠藤先生の発表をよろしくお願いいたします。

6. 【テーマ3】教育心理学の視点からの大切な親子の関わり<遠藤 利彦先生>

○遠藤 遠藤でございます。ありがとうございます。

特に資料等を準備していないのですが、私の方からは、今日、先生方からお聞かせいただきました今回の調査結果の解釈、さらには家庭教育に関する提言など、そういった聞かせていただいたところの感想も含めて、親子の関りのあり方、そして、家庭での教育をどういうふうに捉えたらいいかに関して、少しばかり私自身が考えていること、あるいは考えてきたこととお話しさせていただければと思っています。

すでに今回の調査結果、あるいは先ほどの先生方のお話にもありましたが、共働き家庭が非常に増えている状況の中で、当然ですが、家庭での子どもの生活はこの四半世紀の間に非常に大きく変わってきています。とりわけ、四半世紀の中でも、ここ10年の変化が非常に大きいと思います。

そういう変化が大きいというところで、言ってみれば、これまでの親子関係に関する常識みたいなものを子どもは疑って、そして、新たな親子関係に向けた指針のようなものをしっかりと打ち出していかなければいけない、そういうタイミングになっているのかなと、ご発表を聞かせていただきながら考えていました。

ただし、調査結果からは、親が子どもに対して関わったときに、まさに共感して、子どもの存在を受け入れる受容であったり、子どもが発する声にしっかりと耳を傾ける傾聴であったり、あるいは、子どもという存在に温かい眼差しを向けて、子どものいろんな振る舞いや行動、あるいはまた子ども自身が実際に作ったものや頑張って成し遂げたものなどをしっかりと「見てあげる」注視であったり、そうしたある意味、当たり前のことの重要性を改めて感じたところだと思います。この辺は時代が変わっても、親子関係の普遍性という部分で、どんな文化圏のどんな時代に生きる大人であっても、子どもとの関わりにおいて最も考えていかなければいけないことだと感じました。

ときに心理学では、親の主導的な関わりではなくて、子ども主体の関わりということで、まさに子どもの主体性、あるいは自発性といったものを尊重して、それを支え、促していくというような働き方というのが、結果的には子どもの心身の発達を最も健康な形で推し進めることにつながるということが言われています。今回の調査結

果の中でも、例えば、命令的な働きかけではなくて、助長的な働きかけの有効性が、いろんなところで確認されていたような気がいたします。

世界的にも、現在、VUCA（ブーカ）とも言われているこの時代で、変化が早くて見通しがきかない。そしてまた、いろんな考え方が複雑に入り乱れ、そしてまた何が良くて何が悪いかの基準が非常に曖昧化してきています。そういう混沌とした時代状況、おそらくその程度というのは今後ますます増していくと予測される中で、これからの未来をたくましく生きていかなければいけない子どもが、どんな力を身につけていくべきか。OECDなどは、それを「エージェンシー」という言葉で表現していますが、ときに日本では「責任主体性」という言葉に置き換えられるのかもしれませんが。それこそ自分の頭で考えて、「良い・悪い」をちゃんと判断して、自分で目標・目的を設定して確実に前に進んでいく。そして、自分が取った行動に関しては、しっかりと責任が持てるということ。言ってみれば、誰かが示した基準であったり価値観だったりをもそのまま素直に従っていてもはや幸せに生きることができない。そういう時代になってきています。そういう中で、子ども一人一人が自分の頭で考えて前に進んでいく力の重要性というのが、声高に叫ばれているのだと思います。

そして、そういう「エージェンシー」は、大人からの働きかけ、あるいは親子関係の中で培われたり育まれたりするものだと思います。当然ですが、これはやはり幼少期の段階から子どもの主体性や自発性というのを、とりわけ親という存在が最大限に尊重して、それを支え、促していくという働きかけが決定的に重要な意味を持つと思うところです。

まさに今回の調査結果では、助長的な働きかけが、そこに深く関わる一つのキーワードになるのかと思いますが、そういったことを改めて家庭教育の中核として位置づけていくということが、非常に大切なことなのではないかと、いろいろな分析結果を見させていただく中で感じました。

ご存知のように、子ども家庭庁が創設されました。その子ども家庭庁が、特に幼少期について「はじめの100か月の育ちビジョン」を打ち出しています。

100か月というのは、子どもがオギャーッと産声を上げた段階がスタートではなく、まだお母さんのお腹の中に胎児としている段階、その在胎期間の10か月をスタートと考え、その後、小学校に上がってから1年生の12か月間までをいいます。こ

のおよそ100か月における子どもの経験を豊かなものにしていくこと、それを充実させていくことが、生涯にわたる人間の心と体の健康、あるいは人格の形成の基盤につながっていくということが、この「はじめの100か月の育ちビジョン」において強調されています。

そして、この「100か月の育ちビジョン」でとりわけ声高に叫ばれているのが、子どもの育ちには、安心と挑戦の繰り返しが非常に重要であること、幼少期に子どもがしっかりと安心感に浸っていられることが重要であるということです。安心・安全とは言い方を変えれば、あらゆる不安から解放されている状態です。

言うまでもありませんが、子どもは少しでも不安なことがあると、遊びに夢中になれるか、活動に夢中になれるかという、なれるはずがない。あらゆる不安から解放されて、初めていろんなことに没頭できるのです。その状況をしっかりと、まずは大人が支えていく、安心感に浸った状態で子どもは積極的に冒険や探検をする。いろんなものを自分で探して発見しようとする。そして、面白いものが見つければ、それにチャレンジ、挑戦しようとする。でも、ときにその挑戦はうまくいなくて、くじけることもあるかもしれない。しかし、そのネガティブな感情「うまくいかなかった」「がっかりした」感情を経験した時には、また、それこそお母さん、お父さんという存在のところに身を寄せて、そこで受け止めてもらって、「ああ、もう大丈夫」、そこでまたその元気という感情の燃料を補給し直して、また子どもは積極的に外界に出て行って、好奇心に従っていろんなものを探索、冒険して、また何かにチャレンジする。その安心と挑戦をひたすら繰り返すというのが、本来の子どもの日常なのであり、その中で子どもはさまざまな心の力を自ら身につけていくのです。

その安心と挑戦の繰り返しがしっかりと確保されるような状況、環境を、いかに大人が実現することができるか。実はその安心と挑戦というのは、言い方を変えると、心理学では従来「アタッチメント」と言われているものであるわけです。怖くて不安になるときに身近な誰かにくっついて、もう大丈夫だっていう安心感に浸ること。ある意味、それだけのことです。すごく当たり前のことですが、まずはこの当たり前のことがどれだけ自然に安定して経験できているか。これが実は私たち大人が頭で考える以上に、人間の一生涯にわたる心と体の健康や幸せの形成に非常に重要な役割を果たしているのです。そして、そのアタッチメントがしっかりと経験できている状況で、

子どもは探索活動を行うことができる。言ってみれば、「何かあったらあそこに行けばいい」という、確かな見通しというのを持てるとその見通しに支えられて、子どもは積極的に身の回りの世界を探索し、いろんなものにチャレンジできるようになっていくのです。その「アタッチメント」と「探索」という言葉が、心理学ではよく使われます。

しかし、子どもが安心感に浸った状態で、いろんなものに好奇心を持ってチャレンジする、探索活動を起こすには、大人が一つは「避難所」の役割…、それこそ避難所というのは、何かあったときに駆け込むところです。怖い、不安。あるいはちょっと感情が乱れた、ちょっとイライラした、そういうときには、大人のところに身を寄せて、まさに避難所に戻って受け止めてもらって、もう大丈夫という安心感を回復させて元気の燃料補給をしたら、また同じ大人を今度は「基地」にして、そこから元気よく飛び出していく。元気の燃料補給を終えて、燃料を満タンにした上で基地から飛び出して探索をするわけです。大人は、その避難所と基地の役割を担います。避難所というのは言ってみれば、子どもを受け止めて、崩れた感情を立て直すという役割ですが、基地というのは言ってみれば元気になった子どもの背中をしっかりと大人がまた押してあげるという役割ということが言えます。

いかに子どもが自発的にいろんなものに興味を持って取り組めるか、それを大人が黒子となって、あるいは応援団として積極的にそれを支え促していくということが基地という役割になるのだと思います。

大人の避難所と基地の役割がバランスよく果たせているときに、先ほどの言葉で言えば、安心と挑戦の繰り返し、言い方を換えれば、アタッチメントに支えられて積極的に探索活動ができると言われているわけです。すごく当たり前のことですが、この当たり前のことをどれだけ経験できているかが、実は一生涯にわたる私たちの発達の鍵であるということが、最近いろんなデータによって証明されてきていると言えます。

実は今回、「避難所」とか「基地」とか、そういう言葉は使われていないのですが、実際、調査結果から見えてきたものは、まさに親という存在が、ときには避難所の役割を果たして子どもの気持ちを受け入れて、しっかりと相談に乗ること。そして、子どもが気持ちを立て直したら、今度は積極的に、それこそ助長的な働きかけなどを通

して、子どもをどんどん好奇心の対象に対して向かわせていくことの大切さだと言えるかと思います。

一方で、今回の調査結果の中でも、家庭教育の中では、叱る・褒めるということが、非常に重要であることが見えてきた気がします。とりわけ、褒めることに関しては、子どもと一緒にいる時間が長ければ長くなるほど多くなります。ただ、叱ることに関しては、子どもとどれくらい離れているかということとの関連はなかったという結果も示されたと思います。

そしてまた、今回の調査結果の中で、褒めるべきときに褒めているかという観点からの分析結果も、佐久間先生の方から提示されていたかと思います。実際に、子どもは自信を持って、自己肯定感あるいは自尊心を高く維持して、いろんなものにチャレンジするには、まさに大人が積極的に「子どもが自発的に起こした行動」に対して賞賛する、褒めるという行動が非常に重要な意味を持つと言えるでしょう。

ただ一方で、その褒めることが多ければ多いほどいいかというと、実は心理学的に言うと必ずしもそうではないのです。褒める・称賛というのは、「more is more」、必ずしも多ければ多いほど多くのことを子どもにもたらすかということそうではない。あるいは「more is better」、多く褒めれば褒めるほど、それが子どもにとってより良い結果をもたらすかということ、そうとは言えないということです。

日本も含めて、いろいろな文化圏で行われている教育心理学的な研究によれば、実際に子どもの力を伸ばすことに成功している親御さんや学校の先生がどれだけ褒めているかということ、回数からすると実はそんなに多くはないということが明らかにされています。むやみやたらに褒めはしないということです。逆に言えば、褒めるべきタイミングで、褒めるべきことをしっかり褒める。それが最も効果的だと言われているわけです。

実は、褒めることに関して、日本でも「褒めて子どもを伸ばす」ということが、ここ四半世紀ぐらいは、当たり前のようによいこととして語られるようになっていきます。ただ、世界全体を見渡すと、それよりも前から、例えばアメリカでは「セルフエスティーム」、日本語では「自己肯定感」「自尊心」「自尊感情」と理解してもいいと思いますが、その自尊心、あるいは自己肯定感などを伸ばすということが、子どもの学力の向上につながるはずだ、あるいは、非行や暴力、その抑止につながるはずだ、と

言われてきました。社会的なワクチンとしての自尊感情、自己肯定感、そんなことが言われたことがあります。

アメリカは特に1980年代から、子どものセルフエスティーム、自己肯定感をしっかり身につけさせようという取り組みがかなり盛んに行われました。そして、数値で見る子どもたちの自己肯定感は、実際に上がったということも、その結果から明らかになっています。

しかし、褒めることを通して、自己肯定感が引き上げられたことを数値の上では確認できたのですが、実際にその高められた自己肯定感が、学力の高さや暴力や非行の低さに関連していたかいうと、実はそういうことではなかったのです。

ロイ・バウマイスターという、セルフエスティーム、自己肯定感の研究において世界的な権威と言っている人がいます。この方は、当初は積極的にこの自己肯定感を伸ばすというところの活動を推進していましたが、21世紀に入った段階で、果たしてこの自己肯定感を伸ばすために褒めるということが、実際に子どもの発達に寄与したのかという、必ずしもそうではなかったという結論を、この方自身がすることになります。

実際、自己肯定感と学力の高さであったり、あるいは暴力や非行傾向の低さであったりというのは関連しています。関連しているのですが、因果関係はどうかというと、実際に頑張っ勉強ができるようになったから自己肯定感が高まる。この因果関係は確実に言えるのですが、自己肯定感が高まったから学力が高くなるかというと、こちらの因果関係は見出されないということです。

そして、褒めて自己肯定感を伸ばすというところで、実際にどんなことが行われたかという、確かに「あなたは偉い」「すごいね」と子どもをたくさん褒めた。しかし、あまり根拠なくただたくさん褒めたのです。子どもが何か特別なことを頑張ったわけではないのに、「偉い」「すごい」という賞賛を受けてしまう。そういう賞賛を受けることで、確かに子どもは自分に自信を持てるかもしれませんが、しかし、それは言い方を変えれば、根拠の伴わない自信ということになるわけです。「カラ自尊心」と言ってもいいかもしれません。「カラ自己肯定感」、根拠の伴わない自己肯定感。これをいくら高めても、実際のところ、子どもの発達にプラスに働くことはありません。むしろ、それはときにマイナスに作用してしまうこともあるのです。そのセルフエステ

チームの研究の第一人者だったバウマイスターという先生は、21世紀に入ってからそういう結論付けをするわけです。

ただ逆に言えば、根拠のある褒め方は、実は確実に子どもにプラスの意味をもたらすということが言えるわけです。実際、子ども自身が何か自発的に取り組んで、そして一つでも二つでも、それまでできなかったことができるようになった、あるいは、必ずしも十分に結果が伴わなくても、すごく辛抱強く頑張った、そういうことを捉えて、具体的に「こうこうだからすごい」「こうこうだから〇〇君は偉い」と、ちゃんと理由付けを示した上で、しっかりと称賛していくことによって、子どもは本当に正当な意味での自己肯定感を持てるようになります。重要なのは、根拠のない自己肯定感では当然なくて、根拠を伴っている正当な自己肯定感、自尊心を子どもが持てるように大人が働きかけていくことが必要である、ということが改めて言われるようになってきているように思います。

そういう意味では、この「褒める」ことは回数ではなく、褒めるべきところ…、子どもが自発的に何かに興味や関心を持って夢中になって何かやったら、昨日までは全然できなかったことが一つでも二つでもできて、子ども自身がそれをすごく喜んでいる。そういうところを捉えて、しっかりと理由付けを伴わせて褒めると、実際に効果が出るということが言われているのです。

そしてまた、別の文献からの研究になりますが、すごく褒められている子どもというのは、実際、例えば学力を伸ばす傾向があるかという、実はそうとは言えないのです。それこそ頻繁に褒められている子どもは、特にあまり根拠なく、別にたいしたことでもなくても褒められているということを日常的に経験している子どもは、実はいつも自分が評価されているという意識を持ちやすいと言われています。自分の良い・悪いというところに、大人はいつも目を向けているという意識を持ちやすくなるということです。一般的な言葉では「褒められ中毒」という言葉で表現されることもありますが、あまりにも頻繁に褒められている子どもは、いつも自分が評価されているという意識が非常に強くなって、そこに過敏になると…。言ってみれば、失敗することに対して非常に恐怖や不安というのを持つようになるのです。そして、結果的に「失敗しそうなことはやるな」という気持ちが強まってしまうわけです。

そうすると、具体的にはちょっと上のレベルの困難な課題などに積極的に取り組まなくなってしまう。失敗しそうなことを避けて、言ってみれば、やれそうなことというところで…と、自分の活動の範囲を自分自身で狭めてしまうことになりがちです。

ですから、わりあいよく褒められているお子さんは、もちろん自己肯定感が高く、学校などの成績もそれなりにはよいと言っても、そういうチャレンジという難しい課題などに取り組むことに億劫になってしまうがゆえ、意外とそれ以上の伸びが期待できない…。そんなことも一方では、実際にいろんな研究から明らかになっているのです。

そういう意味で、「褒める」ということに関して、褒めることは非常に効果的なのですが、「褒め方」が非常に大切なポイントになるのかなと、改めて感じたところです。そうしたことも含めて、「褒める・叱る」について、実際に日常的には、子どもはやっぱり自分の親御さんから最も多く聞く言葉かもしれません。しかし、そのちょっとした褒め方・叱り方の違いで、子どもの心の持ちようが、だいぶ違ってくると言われているわけです。

叱り方で言うと、よく「全否定ではなく、部分否定」と言われます。要するに、「あなたのことは大好き。あなたのことは全部受け止める。しかし、今やったここはダメ」というふうに。その子どもの全体を否定するような叱り方は、子どもに対して非常にダメージを及ぼします。重要なのは部分否定ですね。子どもの存在をまるごとしっかりと受容した上で、この部分、「今やったこと、ここはこういう意味でダメだよ」ということをしっかり伝えるという叱り方は、非常に有効だと言われています。

そういう意味で、こういう「褒め方・叱り方」の「方」という部分に少しこだわることが、私たち大人にとっては大切なことなのかなと思います。

いずれにしても、今回の調査から「叱る・褒める」とか「助長的な声かけ」といった関わり方、親子関係、あるいは家庭教育のコアになるところの重要性が改めて見えてきたような気がします。そうした中で、今後、短い時間であっても、その親子関係を濃くするために、私たちは情報として何を親御さんに提供していくべきかということに関して、新たなヒントが得られたのではないかなと思っています。

少し長くなってしまいましたが、そんなことを思ったという次第でございます。はい、とりあえず以上になります。

○品川 ありがとうございます。それでは、佐久間先生、いかがでしょうか。

○佐久間 遠藤先生、ありがとうございます。1点お伺いしたかったのですが、例えば、親が子どもを褒めるという中で、直接親自身が子どもの声を認識して褒めるということもあると思うのですが、よく「〇〇君のママから聞いたよ」とか、他者が見て褒めるという行為ですよね。昔だったら、学校の先生に怒られて余計怒られたみたいなものもあるかもしれません。そういうような他者の褒めたことを褒めるというのも、何かいい影響はありますか。

○遠藤 それは一般的にすごくいい影響があると言われています。

実は、子どもというのは、いつも接している大人からではなくて、いつも接していない大人から、例えばお父さんやお母さんからは普段言われなようなことについて褒められたりすることが、実際のところ、その子どもの自己肯定感を高めるところにおいては、非常に有効に働くと言われています。

逆に言えば、お父さんやお母さん以外の誰かから褒められたということを間接的に親御さんが聞いて、改めて親御さんが普段見ていない自分の子どもを見直すきっかけになり、それを子どもに対して、お父さんお母さんがちゃんと言ってあげると、子どもは、今まで見てもらっていない自分をお父さんやお母さんにも見てもらったという意識になって、かなり効果を持つということが知られているような気がします。

○佐久間 ありがとうございます。

○品川 ありがとうございます。村松先生、いかがでしょうか。

○村松 はい、遠藤先生、ありがとうございます。根拠のある褒め方が大事というお話をされました。「何々だから、すごいよ」ということで、私たちが教育相談を受ける

ときも「結果ではなく、プロセスを見て褒める」ということを意識しているのですが、これについては、遠藤先生、いかがでしょうか。

○遠藤 まさにそれも心理学の中で示されている重要な知見です。確かに結果というところに私たち大人の目は向きがちかもしれませんが、とりわけ家庭でそれなりの時間を子どもと一緒に過ごしている中で、子どもが実際に好奇心を持って、そして辛抱強く何かに取り組んでいる。結果としてはまだ十分ではないかもしれないけれども、子どもが粘り強く頑張っている、それを1日、2日、3日…というふうに繰り返していることがあれば、そこに関してちゃんと褒めるということが、子ども自身のモチベーションをしっかりと維持させていくことに、非常に有効になるわけです。

そして、そういう粘り強い頑張りを通して、必ずしも望んだ結果でなくても、一歩でも二歩でも前進があったところで、さらに褒めると、子どもはモチベーションを膨らませて取り組んでいくということがあるのかなと思います。

そういう意味で、結果以上にプロセスですね。その過程というところに目を向けて褒めるよう、親御さんであれば、過程を見ていることが確率的に多い気がしますので、そのプロセスにしっかりと目を向けることが大切なことなのではと思います。

○村松 ありがとうございます。

○品川 それでは佐藤先生、よろしくお願いいたします。

○佐藤 ありがとうございます。非常に気づきのあるお話してくださいました。中でも、最近、学校では自己肯定感を高めるのが非常に大きな課題になっていて、ときには先ほどふれていただいたように、自己肯定感を高めると学力が高くなるとか、問題行動が少なくなるというのが比較的で信じられているところがあります。

でも、そうではなく、むしろ逆で、学力の高い、問題を起こさない子が、自己肯定感が高いという意味で納得して、目から鱗まで出る点がありました。こういう知識をもっと広げていただいていいのかなと思います。

あと、日常的に評価されると褒められていることがどうなるかという、「褒められ中毒」とおっしゃいましたが、これは他の価値観には合わせて自分の行動範囲を狭くしてしまう。そうすると、これは最初の方にお話しいただいた、エージェンシーというか、他の価値観に従うだけではよろしくないという、その辺にぶつかってくるわけです。だから、そういうエージェンシーを育てるためにも、「褒められ中毒」を避けるということが大事であるというお話を伺いました。

あと、叱るときは部分的な否定が望ましいと。おそらく人格面を叱ることを避けるようにすることですね。だから、褒める場合も部分的に具体的にほめればよい。それがいわゆる根拠のある褒め方で、自己肯定感の高まりにつながるのかなと思ったわけです。

少し簡単な質問ですが、先生のご専門のアタッチメントの問題。これは基本的に生まれてしばらくはお母さんとの関係で、少し経ってからお父さんとかその他が来るということで、このアタッチメントがうまくいかない場合が多分あると思いますが、それがその後どういう場面で負の影響があるのか、先生の研究の中で教えていただければと思います。いかがでしょうか。

○遠藤 はい。アタッチメント対象が誰かということになると思いますが、そもそもアタッチメントというのは、日本語では「愛着」という言葉でずっと言われてきました。「愛着」と「愛情」という言葉が、感覚的に近いんです。「愛」という言葉が両方に含まれているというところで。愛着と愛情というのがごっちゃにされていて、それこそ愛情をたっぷり注いで接してあげること、イコール、愛着（アタッチメント）みたいに考えられてきてしまっているところがあるのかなという気がします。

ただ、アタッチメントというのは、それこそ言葉通りでアタッチすることです。怖くて不安感情が崩れたときに、特定の大人の人に心理的あるいは身体的な意味でくっついて、もう大丈夫だという安心感に浸ること。本来それを意味するわけです。

実は、これは子ども限定の考え方ではなく、人間の一生涯にわたってずっと大切なものであり続けるという大前提があります。私たち大人も、ときどきつらい気持ちになったり、不安な気持ちになったりします。そういうときには誰かと一緒にいたいと

か、誰かと話をしたいとか、誰かに話を聞いてもらいたいという、少なからずそんな気持ちが心の奥底から湧き上がってくると思いますが、実際に誰かと一緒にいる、あるいは話をする中で、また徐々に心の落ち着きを取り戻して、また明日から頑張ろうという気持ちになって、そこそこ健康に過ごせているというような気がするわけです。これも言ってみれば、すべてアタッチメントになります。

そもそも人間というのは、安心感に浸れている状態こそが、イコール、心と体が最も健康に機能している状態だと言われています。私たちは、言ってみれば、心と体を健康に保つために、この安心感を維持しなければいけない。その安心感の回復とか維持というところに関わるのがアタッチメントですので、これは大人にとっても際立って重要なものになるわけです。もちろん、とりわけ小さな子どもは容易に怖がる、不安がる存在ですので、アタッチメント行動というのをより頻繁に起こすわけですが。

そして、一般的には、物理的にいちばん近くにいる人にくっつきます。少なくともこれまでは家庭の中で、今はそれこそあの先ほどのデータの中にもあって、共働き家庭が増えて、女性の就労率も高まったということでだいぶ変わってきていると思いますが、少なくとも日本の場合は、これまではどちらかというとやはり物理的にいちばん近くにいる、しかも長時間、いちばん一緒にいる人というのはお母さんだったので、実質的にはお母さんがアタッチメント対象になるというケースが非常に多いということ、これは間違いのないことだと思います。

ただし、子どもというのは、実際のところは、父親をいちばん主要なアタッチメント対象にしたりとか、あるいは家庭以外の保育者の先生をアタッチメント対象にしたりということもあります。

実は、子どもにとっていちばんのアタッチメント対象が誰かということに関しては、かなり違いがあることも知られています。そして、また仮に、そのいちばん近くにいる、あるいは長時間いるお母さんとの間のアタッチメントが不安定であったとしても、それ以外の大人との間に安定したアタッチメントがあれば、それをわりあい早い段階で経験するということができると、子どもの発達に関しては、特にダメージは及ばないということも知られています。

言ってみれば、父親という存在との間でアタッチメントがうまく経験されていたり、あるいは、家庭に恵まれていないお子さんについては、家庭ではどちらかという

と少し放っておかれてしまうことの多いお子さんであったとしても、例えば、保育所に通っていて、そこでお気に入りの保育者の先生との間で、安定したアタッチメントを経験し直すことができたりする場合には、そのお子さんの発達はかなりの実で健康な形で進むということも、データの中で示されていることだと思います。

もちろん小学校に上がってから、あるいは中学校に上がってからも、幼少期のアタッチメントにおける、ちょっとしたつまずきというのは、十分修復できる可能性というのはあるかと思っています。学校の先生とか、家庭以外で子どもが頻繁に関わることなのでしょう。もしかしたら、それは塾の先生なのかもしれません。あるいはスポーツ教室の先生ということもあると思います。

子どもというのは、自分自身で特定の大人の人のところにちゃんと近づいていけるのです。そういう環境の中で育っている限りにおいては、子ども自身がそういう人を選んで、そういう人から自分の感情の調節をしてもらうように、主体的にも動くことができれば、子どもの発達というのは、比較的健康に進んでいくと考えていいのかなと思います。

ただ、人間は何歳になっても変わることができるということ、これは心理学の一つの重要な知見ですが、ただ変わることにはできるのですが、実は年齢が上になればなるほど若干変わるのが難しくなるというのが一つの事実です。できれば、この変わる機会というのは早いタイミングであった方が望ましいということも、我々が受け止めておかなければいけない事実なのかなという気がします。

そういう意味で、もし親子関係などにつまずきのあるお子さんに関して言うと、できるだけ早いタイミングで周りの大人の人が、どういう形であれ、そのお子さんにアプローチできるかということが鍵になるのかと思います。

○佐藤 どうもありがとうございました。

○品川 それぞれ3人の先生方、発表をありがとうございました。3人の先生方の発表を少し盛り上がりすぎてしまいましたので、次、40分までとなりますので、全体の討論ではなく、総括という形で、それぞれの先生からお話ししていただくような形にさせていただきたいと思います。

お手元にこの「10分よりそい」パンフレットを同封していると思います。今回の座談会の中で、いろいろ3人の先生方、そして佐藤先生からたくさんの指導をいただきましたが、いちばんの課題として「質の高い関わりをどう認知していくかというところが課題です」というお話になったと思います。こちらのパンフレットをもとに、私ども全家研ポピーでは「10分よりそい運動」というのをこれまでもしてまいりましたが、より今の時代に合った、共働きの8割という中で、実際どういった伝え方をしているのかという視点で、押さえないといけないポイントについて、それぞれの先生方から語っていただけたらと思います、よろしいでしょうか。3分ぐらいになります。大変短い時間になってしまって、申し訳ございません。

それでは、佐久間先生の方からよろしくお願いいたします。

○佐久間 はい、そうですね。为什么呢。現代的な話題で言えば、それこそSNSというのがいちばん無難なのかなとは思いますが、例えば、ギガスクール構想の中でタブレットが導入されましたので、アプリを導入するというのが一つ手かなと思っています。特に、アプリやそのデバイスのいいところは、親と共有しやすくなるということです。このiPadもそうですが、アカウント一つで複数のiPadでつながれますので、そういう部分でも活用できるのかなと、ふと思ったところです。

今、お話を聞いていろいろ考えたのですが、例えば、別の会社さん、ベネッセさんで進研ゼミの大学講座が今度タブレット化します。考えてみると、家庭学習や各家庭での学びの教材は紙から…、それこそ1990年代には、もう学習塾というような形で一度家庭の外に出たかなと。しかし、タブレットになると、今度また（家庭に）戻ってくる可能性があるわけです。そういうところをうまく活用すればいいのかなと考えたところが1点目です。

こちらのリーフレットを拝見して、単純に思ったことが一つだけあります。実はこれはA4ではなくて、B5の方がいいのかなと思いました。つまり、持ちやすい…と言わないですけど、バッグに入れやすいですね。というのも一つ手かなと思ったところと、あとこれは都市部に住んでいるせいかもしれませんが、よくポストにマグネットが入っています。水道工事の。あれを捨てるのは意外に面倒くさくて（笑）、たいい冷蔵庫や玄関のドアに貼ってあるパターンが多いと思いますが、ああいうふう

簡単に掲示できるようなものも一つ手なのかなと。大々的にポスターを貼るのではなくて。ちょっとポンと貼っておけるようなものでも、意外にいいのかなと思ったところですよ。

情報提供の方法としては、このようなことを考えたということですよ。はい。

○品川 ありがとうございます。遠藤先生、いかがでしょうか。

○遠藤 はい。この「10分」というところの親子の関わりの工夫というのがもちろん必要なかと思います。ただ、私たち大人は、子どもにできるだけ特別なことをいっぱいやってあげた方がいいとか、特別な刺激をいっぱい与えてあげた方がいいです。それこそ「more is more」の原理で、与えれば与えるほど子どもの力は伸びるはずだ、やってあげるということが大人の役割だと、ついに考えてしまいがちところがあるような気がします。

ただ、実際のところ、子どもの発達を最も健康な形で実現するということができる親御さんは、実はそんなに子どもに積極的に特別なことをやっているかというと、やってはいないわけです。それこそ「避難所」と「基地」。何かあったときには受け止めて慰めてあげるということ、そして、元気になったらちゃんと背中を押して見守ってあげるということです。それこそ黒子になって下支えするということと、応援団として離れたところから声かけをしたり、温かい目でじーっと見ておいてあげたりすることがより大切な意味を持つわけです。

近くにいて子どもが何かに一生懸命取り組んでいるとしたら、それをじーっと見ておいてあげる。そうすると、とりわけ小さな子どもの段階では、特に問題が起きたときには、ちらっと後ろを見て、「できた、できた」と喜んで、満面の笑顔でお母さんやお父さんの顔を見ようとします。そのときにしっかりと笑顔で返してあげるというようなこと。すごく当たり前のことですが、その当たり前のことの中で子どもは勇気づけられるのです。もっとやってみたいという気持ちが、さらに膨らんでいく気がします。

そういう意味で、何かいっぱいやってあげるといよりは、何かあったときに子どもにとって戻れる「避難所」、そして、何かを思い立ったときにそれを見て応援してあげられる「基地」ということ、これが基本になるのかなと思います。

（関わることができるのが）短い時間であればあるほど、何かをやってあげないといけないという気持ちが強まってしまうのかなという気がします。しかし、実際のところは、それはお子さんの発達には必ずしもプラスに働かないということがあるような気がします。個人的には「避難所」「基地」という役割を少し意識していただけるといいのかなと思ったところです。

○品川 遠藤先生、ありがとうございました。村松先生、いかがでしょうか。

○村松 はい、ありがとうございます。先ほど私の発表の中で付け加えというか、コロナ前とコロナ後のポピーを使う学習の質問がありましたが、先ほど山田と話をしていて、ポピーの使い方についての質問が減ってきているのは、ポピーをそのまま与えてやっていて、あの関わっていないのでポイントかと…。コロナ前は、「こうやって使おう」などと関わっていて、その後は忙しくなってきてそのまま投げているパターンがあると。それで、相談を受けていると、「あ、そのポピーの使い方を知らなかった」ということがいくつかありましたので、そういう傾向もあるのかなということで付け加えさせていただきました。

あと「10分よりそい」は、私たちが進めているわけですが、表面で「全家研では10分よりそい運動を進めています」ということで、「1日に10分、親子で向き合う時間を作りましょう。朝の時間、家庭学習の時間、夜寝る前の時間など、10分間、子どもの顔を見て会話を楽しみましょう。」とあります。

これも朝の時間であるとか、家庭学習の時間はなかなか厳しいと私自身は思っています。自分の娘が今、子育てをしています、それを見てもそう思います。だから、私が発表させていただいた中でも、親子読書読み聞かせ、夜寝る前の読み聞かせを5分でも確実に取っていく、確実に続いていく…。「10分よりそい運動」は、たまに10分寄り添って、次の日は20分か30分で、あとはやらなかったりすると、平均して10分ではなくて、毎日10分、毎日続けられるということが大事だと私は思っ

ています。「継続は力なり」ではありませんが、そういうことで少し焦点をどこかに当てることも必要なかなと思っています。

先ほど、遠藤先生の方からエージェンシーの話がありました。ラーニングコンパスの中での言葉ですけれども、子どもたちが目標を持って、目標を設定して、振り返り、責任を持って行動する能力ということですが、子どもと親が関わる時に「こうやってやりなさい」「ああやってやりなさい」ということではなくて、この中にもありますが、子どもに考えさせて、そして私たちは相談を受けるときに、「どうしたらいいか、まず聞いてみませんか」と保護者の方にお話します。あと、「選択肢を2つとか3つ与えて、どれか選ばせたらどうですか」ということで、エージェンシーを育てるように、保護者の方たちには意識してもらうように…、エージェンシーという言葉は使いませんが、そういうことをしています。この辺のことなんかも少し盛り込めたらいいなと、今見ていて思っていたところです。以上です。

○品川 村松先生、ありがとうございます。それでは最後、佐藤先生、よろしくお願いします。

○佐藤 簡単に申し上げます。先ほど、子どもの目を見て話を聞いたりするということを少しおっしゃいましたが、「笑顔で」ですね。顔の表情がより大事なのかなと思います。笑いながら叱ると気持ち悪いのですけど(笑)、褒めるときはぜひ笑顔でというのが非常に大事なかなと思います。顔の使い方ですね、表情とか。その辺も大事なかなと思いました。

どうしても子どもとの関わりが短い場合、制約は相当あります。遠藤先生がおっしゃったように、日頃関わりのない人から褒められるということにも意味もあるということですが、いわゆる、第三者の教育の力をどう借りるのか。民俗学者の柳田国男、有名な方ですが、あの人が主張した「群れの教育」、みんなで群れるということですが、その中で「笑いの教育」が言われていて、「あの人に笑われるから、ちゃんとしなさい」という、そういうしつけが行われたということで、これはだんだん解体してくるのです。昭和の頃には第三者の力を借りていたという傾向もあったわけです。親の言うことを聞かないと、子どもに「おまわりさんのところへ連れていくよ」と言った

り、学校の中で担任の先生が自分のクラスの子どもに「校長室に連れていきますよ」と言ったり、第三者を使うのです。「夜に口笛を吹くと、蛇が来るからやめなさい」というのも第三者を使った例です。電車の中でがやがや騒いでいると「あそこで怖いおじさんが睨んでいるからやめなさい」とか。

でも、だんだん第三者が弱くなっているのです。そうした中で、また「第三者の教育」というのは非常に大事だろうということで、こういう力を積極的に活用できるような働きかけも必要なのかなと思います。その方がむしろ、子どもにとって日頃接していない第三者から何か言われる、褒められるということは相当意味があって、叱られるときも効果があるのかなと思いました。

ただ最近、これは良い・悪い別ですが、しつけに関して価値観が非常に曖昧になってきています。昔よく言った「子どもらしい」、今ではほとんど使われなくなり、「男らしい」「女らしい」も言われなくなっていますが、「何々らしい」というのが曖昧になって、ほとんど消滅しています。親の方では「じゃあ、どうしつけていいのか」、言い方は悪いですが「どう型にはめるのか」。

昭和の私たちが子どものときに、男の子が暖色系の服を着るのはあまりなかったです。今は関係ないですけど。なぜかと言うと、昔は「男らしくない」みたいな適当な価値観があったわけです。そういうものがなくなってきて、すべて個性になってくるという、その辺の曖昧さもあるのですが。しかし、エージェンシーの立場でいうと、そういう価値観に乗せるのもよくない。そのさじ加減が非常に難しいのかなと思いました。

どうすればいいかということですね。10分間で子どもの話を聞いたり、子どもに話を聞かせたりすることはいいのですが、とにかく子どもと楽しいことするというのがいちばんいいのかなという感じです。子どもの方ものるんですね。さっきちらっと言いましたが、家庭教育学級で勉強ばかりしようと言うと、親は来なくなってしまいます。

料理でもものづくりでも、あるいはゲームでもいいのですが、そこから入っていくようなところは大事ですので、短い時間でも親子一緒に楽しめるということは、短時間の中でも肯定的に捉えられていたこともありますので、とにかく親子で楽しんでく

ださい。その中で褒めたり、場合によっては叱ったりすることが当然行われると思いますので、その辺を大事にしていだけるといいのかなと思いました。

○品川 貴重な座談会をありがとうございました。それでは最後は大浦の方から相手に挨拶をお願いします。

○大浦 全家研教育対話部の大浦でございます。公益財団法人の主査も兼務しております。

佐藤先生、遠藤先生、佐久間先生、村松先生、今日は誠にありがとうございました。この調査のきっかけは、長引いたコロナ禍を経て、社会環境とか家庭環境が大きく変わる中で、家庭の子育て、家庭教育への意識を明らかにしようとする目的で、「令和6年度 子育て意識・状況調査」に取り組んでまいりました。

本日の先生方のご意見ご討論によって、現状の課題がより鮮明にさらに大きく目の前に立ちのぼったような気がしております。これから、私たち家庭教育支援を進めていく上で、本当にしっかりやらなければいけない時代になってきているなという、本当に力強く進んでいきたいというふうに思っております。

現状を申しますと、対話主事の先生方は、ご家庭の保護者からのご相談を受けながら、どちらかというとき自己肯定感が低い親御さん、弱ってしまっている親御さんの避難所であり基地というのが、私が見ていてとても感じる場所なのです。そういう親御さんのアタッチメントで育っていなかった親御さんに、どうやってこれを伝えていくのかというのが大きな、大きな課題になっていくのだろうなという気がしております。

奇しくも、今日2月28日は、昨年、ちょうど1年前に帝京大学八王子キャンパスに佐藤先生をお尋ねした、ちょうどまさにこの日なのですね。丸一年ありがとうございました(笑)。今後とも、当公益財団の調査研究、それから全家研ポピーの教育支援の方にどうぞご協力を頂戴できればと考えております。ありがとうございました。

それでは、これにて第12回座談会を閉会いたします。先生方、どうもありがとうございました。

○全員 ありがとうございました。